

自治産業コロニー「クズバス」とリュトヘルス(6) : 事業の更なる発展からその清算へ

山内, 昭人
九州大学 : 名誉教授

<https://doi.org/10.15017/7361467>

出版情報 : pp.1-36, 2025-06-05. Kyushu University
バージョン :
権利関係 :



自治産業コロニー「クズバス」とリュトヘルス (6)

— 事業の更なる発展からその清算へ —

山内 昭人 (九州大学名誉教授)

はじめに

第1章 事業の更なる発展

第2章 リュトヘルス療養中の管理および通信体制

第3章 コロプキン問題と「クズバス」の清算

おわりに

はじめに

1925年1月1日にАИК-Кは、これまでのケメロヴォ鉱山とコークス化学工場に、レーニンスク・プロコピエフスク両鉱山およびグリエフスク工場を併合することになった。本篇は、第5篇の続きで、その「併合」後、1925年から(最終年となる)1926年にかけてАИК-Кの事業発展の経過を、管理運営上の問題を軸に(とは言っても繰り返し述べてきた第1次史料の制約から十分とは言えないが)第1章で略述する。

第2章では、前篇で考察した(第5篇、24-27)カルニン(А.Э. Калинин)へのリュトヘルス(S.J. Rutgers)の代理人任命とその解任に至る顛末に続いて、その後のリュトヘルス病気療養中の暫定管理体制およびその間の通信体制について見ていき、コロプキン(К.Н. Коробкин)が新たな代理人として選考されるところまでを扱う。

第3章では、そのコロプキンがАИК-Кの入植者たちの反撥・離反を招いた問題を取り上げ、病状が好転しないリュトヘルスも関わってのコロプキン解任運動および次の代理人要請をめぐる状況の中で、АИК-Кのいわゆる「ロシア化」の動きが再燃し、結局予期せぬかたちでАИК-К清算に至った経緯を明らかにする。その際、当事者間の通信を、限られた(が、しかし従来利用されてこなかった下記の2つの)史料を元に可能な限り追跡し、分析していき、どこに、どのような問題があったかの解明に努める。そして「おわりに」では、その清算に至った経緯を大まかにまとめ直し、主要な問題を論じることにする。

本篇が扱う1925-26年の時期に関する第1次史料の公表は極端に少ない。研究においてもこの時期の考察は手薄であり、時系列的な流れを全体的に把握することには困難が伴

う⁽¹⁾。そのような研究状況の中、私は「クズバス年譜」(第1篇, 2-3)と「シベリアにおけるオランダ人の建設」(第3篇, 2)を活用することによって、各章ごとにリュトヘルス側から可能な限り時系列に沿った考察を試みている。

その時期にリュトヘルスは病気療養を余儀なくされ、そのためケメロヴォをほとんど離れ、帰国し、スロヴァキアとベルギーの療養地にも出向き、その間、同僚たちと頻繁に通信し合ったために、多くの書簡類(写しも含む)がリュトヘルスのもとに残された。それらに依拠して該当時期の「クズバス年譜」は1933年に作成された。その中でソヴェト政府および共産党諸機関との交渉等の直接的な記述は、残念ながら多くはないけれども、「年譜」は現状では最も詳しい記録となっている。ただし、その中で挙げられた多くの書簡類は短い抜粋がほとんどで、その上引用符がなく、地の文との判別も困難な箇所がある。特に АИК-К の命運を分ける1926年の書簡・電報からの抜粋は多く、直に原文を読みたいところだが、それらは第2次世界大戦禍のためにほとんど保存されず⁽²⁾、「オランダ人の建設」に収録された1926年の書簡は、わずかにリュトヘルスが息子2人に宛てた2点とアントン・ストライク(A.G. Struik)が兄ディルク(D.J. Struik)に宛てた2点にとどまっている。

(1) この時期のモレイの本の記述は、『リュトヘルス伝』(露語版)の引き写しに近いものになっており、その上それを小分けしたテーマに即して抜粋・抄訳しており、時間的な前後関係が不明瞭で、時に逆になっている。J.P. Morray, *Project Kuzbas. American Workers in Siberia (1921-1926)* (New York, 1983); Г. Тринчер/К. Тринчер, *Рымгерс* (Москва, 1967).

(2) *Nederlanders bouwen in Siberië (1921-1927)*, 185, in: Archief S.J. Rutgers, Map 15, Internationaal Instituut voor Sociale Geschiedenis (IISG), Amsterdam.

第1章 事業の更なる発展

1925年初めから1926年にかけて АИК-К の事業発展の経過を略述する前に、1925年6月5日のブロンカ (Bronka Kornblitt) の死後、ヤルタからモスクワに戻ったリュトヘルスの動きを少しく記しておく。

リュトヘルスは、病氣療養休暇を続けるため直ちにモスクワからオランダに戻るつもりであった。しかし、АИК-К 本部であるモスクワ事務局のフート (B. Foot) からリュトヘルスは、ラストプチン (Н.П. Растопчин) 議長の СТО 委員会が АИК-К による南部地区およびグリエフスク工場の併合状況の点検のために再びケメロヴォを訪れることを聞いた。それにリュトヘルスは立ち会うため、長くは留まれないが現地へ向かうことになった⁽¹⁾。それにはフートが同行した。出発直前のリュトヘルスの妻バルタ (Bartha Rutgers) 宛 1925年6月19日付書簡には、「フートが、その時またケメロヴォとモスクワとの共同作業をヨリ完全にするため、一緒にケメロヴォに2カ月留まることができるのは大いに頼りになる」とあり⁽²⁾、同行にはブロンカ亡きあとリュトヘルスの病状へのフートの気遣いもあったろう。

モスクワに戻ったリュトヘルスは早速、1925年6月18日にピャタコフ (Г.Л. Пятаков)⁽³⁾ と長く話し合った。翌日にリュトヘルスは、バルタ宛書簡でその報告をしている⁽⁴⁾。そこで明らかとなった3点ほど、ここでは挙げておく。

①以下引用するように、ピャタコフの АИК-К への関与が当時から深くなっていたのであり、そのことは後述する彼によるリュトヘルスの代理人としてのコロブキン指名につながっていく。「彼〔ピャタコフ〕は……〔ロシア共産〕党を通して我々を特別に支援する責任を負っている〔cf. 第5篇, 13〕。彼はそれからまた委員会を提案し、そこで彼は АИК-К に関するあらゆる対立し合いコントロールできない諸報告を受けている。その調査は、いつでも区分されるわけではないが、まっ先に政治的部類のものである。……彼はいかなる

(1) РГАСПИ, 626/1/6/36-37; G.C. Trincher Rutgers/K. Trincher, *Rutgers. Zijn leven en streven in Holland, Indonesië, Amerika en Rusland* (Moskou, 1974), 174-175; Тринчер/Тринчер, *Рутгерс*, 162-163.

(2) Rutgers (Moskou) aan zijn vrouw (Holland), 19.VI.1925, in: *Nederlanders bouwen*, 172.

(3) ピャタコフは1923年5月に ВСНХ 議長代理となり、同議長ルイコフ (А.И. Рыков) が人民委員会議 (СНК) に専念している間、実務的に指導力を発揮し、1924年2月に同議長がジェルジンスキー (Ф.Э. Дзержинский) に交代したあとも同様だった。A. Graziosi, “«Building the First System of State Industry in History» Piatakov’s VSNKh and the crisis of the NEP 1923-1926,” *Cahiers du Monde russe et soviétique*, Vol. 32, No. 4, X.-XII.1991, 539, 549.

(4) Rutgers (Moskou) aan zijn vrouw (Holland), 19.VI.1925, in: *Nederlanders bouwen*, 171-172.

場合も АИК-К のために『自治』などを守り、昔のようにその仕事を続けていた。彼は非常に興味を持ち、我々は『テリベス』計画〔cf. 第 4 篇, 16; 第 5 篇, 10〕についてまた話し合った」。

②「テリベス」計画が話し合われていたように、リュトヘルスは実際の「併合」に着手したばかりであるにもかかわらず、全クズネツク炭田の管理統合をめざし、早くも次の計画実現に向けて行動を開始していた。

③「今週また 1923/24 年度の我々の貸借対照表が承認される。我々は 25 万ルーブリの利益を算出したが、しかし結局 7 万 5 千ルーブリが我々に得られた。……ウラルメットとは、まだ成果なしで、会合すら開けないが、しかし我々は暫定的な調整が即時の全額支払を我々に保証しているので、そのことを強要していない。我々の〔併合直後の〕財政は、まだすばらしくはないが、しかし今のところうまくいっている」。

実は、既述したように、1925 年 1 月早々にクズバス・トラストの負債が判明し、その 50 %を引き受ける АИК-К は財政悪化の危機に見舞われたが、最終的には負債返済のために 15 万と 25 万の計 40 万ルーブリの貸付金が支給されることになった⁽⁵⁾。1925 年 4 月末頃の「クズバス年譜」にも「我々は 40 万ルーブリを得る。それはそんなに悪くはないだろう」とある⁽⁶⁾。

リュトヘルスは 1925 年 8 月末時点で、療養中の身で会合参加も制限した上でテリベスに取り組んでいた。彼は『プラウダ』のためにテリベスに関する 1 論文を書いた。そしてアメリカの新聞雑誌などに対してもう 1 つ書くだらう⁽⁷⁾。ひと月後も同様に、それへの取り組みが記されている。「テリベスの実際の実施について翌年〔度〕にまだ入らないように見える。それはたぶん準備と計画にとどまるようにしているだろう。……しかし常に十分であり、私〔リュトヘルス〕はそれに立ち向かうであろう」⁽⁸⁾。

1924/25 年度（1924 年 10 月 1 日～1925 年 9 月 30 日）が終わる直前の 1925 年 9 月 25 日に、АИК-К への貸付金および АИК-К とクズバス・トラストの財政状態と生産拡大計画に関する СТО 第 184 回会議が開催された。以下、その議事録から抜粋する⁽⁹⁾。

報告：〔議題〕 29.

a) 総額 41 万 5 千ルーブリの АИК-К への貸付金について。

б) レーニンスクおよび南部地区のクズバス・トラストから АИК-К への移管時機までの АИК-К およびクズバス・トラストの財政状況について。

в) АИК-К とクズバス・トラストに関する生産増大計画および後者の主要操業への

(5) “Деятельность «Автономной индустриальной колонии Кузбасс» и её оценка в документах СТО СССР (1922–1926 гг.),” *Исторический архив*, 1961, No. 3, 165; 第 5 篇, 19.

(6) РГАСПИ, 626/1/6/35.

(7) Rutgers (Moskou) aan zijn vrouw (Holland), 29.VIII.1925, in: *Nederlanders bouwen*, 179.

(8) Rutgers (Moskou) aan zijn vrouw (Holland), 22.IX.1925, in: *Nederlanders bouwen*, 180.

(9) “Деятельность АИК-К.....(1922-1926),” 158-159.

11 万 5 千ルーブリの追加補助金の支給について。

決議：29. 以下の決議の承認を考慮に入れる。

a) 1. [ソヴェト] 連邦財務人民委員部 (НКФину) に、運輸通信人民委員部 (НКПС) および陸海軍人民委員部 (НКВоенмором) とともに、АИК-К へ 22 万 5 千ルーブリを、1925/26 年度の石炭供給計画および見積に関して予め決められた勘定書を当てにして前金形式で送金することを委任する。АИК-К に、挙げられた 22 万 5 千ルーブリを賃金の用途に専ら振り向けるように命じる。

2. 連邦 ВСНХ に、1 カ月間で АИК-К の経済活動の成果を審査し、この問題に関する自らの結論をゴスプランを介して СТО に提出することを委任する。

б) ВСНХ および連邦財務人民委員部に、クズバス・トラストのレーニンスクおよび南部地区の АИК-К への移管時機までの АИК-К およびクズバス・トラスト財政状況に関するシブレヴコムを、АИК-К の СТО への報告書とともに 1 カ月間で審査することを委任する。

в) : 1. / 2. / 3.

a) 2. については、編注にこうある。ВСНХ 幹部会は СТО に、АИК-К 資料に目を通す必要のために報告提出の期限延長を再三乞うた。その報告提出は、1926 年 1 月 29 日の СТО 決議で同年 4 月 1 日まで延期され、更に同年 4 月 14 日の СТО 決議で 5 月 15 日まで延期された。ようやく 1926 年 5 月 24 日に ВСНХ 報告が提出された〔その報告自体については後述〕⁽¹⁰⁾。

1924/25 年度の АИК-К の操業全体の成果は、レーニンスクおよび南部地区の併合以前よりヨリ悪化した、とタルレは記しているが、しかし彼が強調したのは以下である。つまり、1925 年の全期間にわたって、国家がコロニーを援助し続けたけれども、財政上の困難が АИК-К に付きまとったが、しかし本当のところは、クズバス・トラストによって貯蔵されていた膨大な燃料の同期間にわたっての現金化が、АИК-К の著しい成果と判明した、と。その調査結果を出す際、以下のようにもタルレは説明している。我々〔史料集を共同で編集したゲンキナおよびタルレ〕の処理では、АИК-К 全企業の操業の個別評価は十分にできない。我々が手元に持っている ВСНХ やゴスプランの報告書類は、АИК-К 活動の〔あくまで〕全般的特徴づけを与え、新事業が概してコロニーの操業を困難にしたことを時折指摘するだけである、と⁽¹¹⁾。

1925/26 年度の初日、リュトヘルスは妻に宛てて書いている⁽¹²⁾。

計画では、私〔リュトヘルス〕が予算案を仕上げて、それからケメロヴォへ行つて、戻ることだった。私はすでにケメロヴォ〔行〕をあきらめた。目下また СТО で予算

(10) “Деятельность АИК-К.....(1922-1926),” 165.

(11) Г.Я. Тарле, *Друзья страны Советов. Участие зарубежных трудящихся в восстановлении народного хозяйства СССР в 1920-1925 гг.* (Москва, 1968), 340-341.

(12) Rutgers (Moskou) aan zijn vrouw (Holland), 1.X.1925, in: *Nederlanders bouwen*, 181.

が審議されている。しかし、これはまだゴスプランで合意されていない。

今晚〔1925 年 10 月 1 日〕、我々はすべてを準備する“arbeidscommissie”〔検討作業委員会のことか〕の最後の会合を持った。それからそれ〔審議結果〕はまだ今週中にか、できれば月曜日〔10 月 5 日〕か火曜日にゴスプランに上がって来る。そこで何か非常に特別なことが持ち上がらないならば、私はゴスプランの結果を待たないだろう。なんと彼らは私をたぶん悪くとるだろう（CTO 〔の結果を待たないこと〕については言うまでもないことだが）。私はかなりもどかしいが、しかしいまにも確実にすべてが我々に有利な決定を下すようになろうとしている。

これは病気治療への専念を余儀なくされたリュトヘルスによる帰国直前の文章であった。治療への彼の切実感は当然としても、予算承認についてゴスプランおよび CTO への彼の期待というか楽観が感じられる。まさか 1 年後に АИК-К が清算されるとは微塵も感じ取られない状況だった。

「クズバス年譜」の 1925 年 11 月半ば頃の項には、こうある。「BCHX は、我々が我々のプランにおいて予定されている以上に多くの石炭を産出できるかどうかの問いを投げかけた。我々は新設のため我々にヨリ多くの資金を用立てられるという条件で、イエスと返答した。しかし、それは可能でないことが証明される」⁽¹³⁾。そのことに関連する文章が、続く 12 月下旬頃の項にある。「我々のコークス増産を伴う計 画プログラムの実施は、ヨリ多くの資金が得られるどころか、更に交付金が削減されようとしているので、この年〔1925/26 年度〕には不可能とみなされる」⁽¹⁴⁾。

「目下の財政状態は悪い」中で、テリベスへの拡張計画に関してその計画を完全に実行できるためには、新投資に活用される 150 万ルーブリの利益にもかかわらず、1925/26 年度のために 190 万ルーブリの交付金がなお必要であると見込まれた⁽¹⁵⁾。にもかかわらず、「クズバス年譜」の 1925 年 12 月の項で、テリベスへの検討は続いている。「テリベスのためのコークス炉は、そこに建設されるべきであった。我々は今月に新建設のため 50 万ルーブリを得たが、しかしこの総額を得るためのすべての協議の経費がほとんど同様に高くなった」⁽¹⁶⁾。

帰国中のリュトヘルスは、数カ月かけてテリベス地域の鉄鉱石資源開発の重要性に関する彼の見解を説く論文を執筆していた（未見だが『ソヴェツカヤ・シベリ』〔Советская Сибирь〕に載ることになる）⁽¹⁷⁾。ピャタコフの方も同計画に関わって、フートにテリベスに関する指示を出し、フートがフレニコフ教授（Khrenikov; フレンニコフか？）と協議した。アメリカから専門技師たちが得られるかもしれないが、しかしその決定はレニングラートの冶金〔工場〕新設中央委員会〔cf. 第 4 篇, 16〕（指導者ロボフ〔Lobov〕）で保留に

(13) РГАСПИ, 626/1/6/40.

(14) РГАСПИ, 626/1/6/42.

(15) РГАСПИ, 626/1/6/40.

(16) РГАСПИ, 626/1/6/41.

(17) Trincer Rutgers/K. Trincer, Rutgers, 175-176; Тринчер/Тринчер, Рутгерс, 163-164.

されたままになっている⁽¹⁸⁾。そのことに関して、既述のように（第4篇，16），АИК-Кのニューヨーク事務局が建設請負業者として“American Foundation Comp.”を提案していた。フートの考えでは、こうだった。「我々の2，3の第一級の外国人専門技師を我々の企業で雇い，彼らをシベリアの共同作業班に代表派遣する時，それは良いだろう。しかし，いずれにせよ結局はクズネツク炭田全体が手中に収められなければならないだろう」⁽¹⁹⁾。

その「第一級の外国人専門技師」の人選を依頼されていた АИК-К ベルリン事務局代表クラスニャンスキー（Краснянский；技師）が，あまりに党员であることにこだわりすぎて技術的力量にほとんど留意しないことを，フートは次のように嘆いていた。「我々は今一連のドイツ人スペシャリストと交渉し，ヨリ多くの契約を結んでいる。がしかし，そこでは第一流のスタッフを得ることに成功していない。その上，ドイツ人スペシャリストはアメリカ人スペシャリストよりも，状況や労働条件にヨリ適合していない。後者はヨリ多く『開拓者の素質』（Pioniersveranlagung）を示している。しかしながら，最良のアメリカ人専門技師〔の年俸〕は高すぎる」⁽²⁰⁾。ここにドイツ人かアメリカ人か，選択が困難であった理由の一端が記されている（もちろん「テリベスと我々の関与の問題は決定されていない」ことが人選に至らなかった主因であろう）。

1926年に入って，2月半ばに治療で小康状態を得たリュトヘルスは，バルタが付き添ってモスクワに向けて2月15日にオランダを発ち，2月23日から3月31日までモスクワに滞在することになった（第3章）⁽²¹⁾。

早速，ピャタコフとの協議を重ね，АИК-Кの ВСНХ との関係の規定についてすでに協議し，合意したリュトヘルスは，1926年3月10日付でピャタコフ宛覚書を作成した。「クズバス年譜」の紹介によれば，以下の4項目を議論の対象としていた。① АИК-К の名の下に全クズネツク炭田の統合；②シベリアにおいて権限のあるロシア人管理者（場合によってはコロプキン）；③組織的な措置；④テリベスのプロジェクト化とその実行への АИК-К の参加⁽²²⁾。

②はリュトヘルスの代理人となるコロプキンの件であり，第3章で取り扱うことにして，①と④によって本章で扱っている項目が重要であったことが（覚書の内容を検討できないのは残念だが）確認できる。この間，①の「統合」にとって原則的には適正だと承認されていた（クズネツク炭田北端のクズバス・トラストが管理し続けていた）アンジェロスジェンスキー炭鉱（Анжеро-Судженский рудник）と АИК-К との統合についての協議ももたれたが，しかし決議には至らなかった⁽²³⁾。

リュトヘルスは（バルタとともに考えていたより長くモスクワいることになっていた）

(18) РГАСПИ, 626/1/6/41.

(19) РГАСПИ, 626/1/6/41.

(20) РГАСПИ, 626/1/6/42.

(21) РГАСПИ, 626/1/6/45-46.

(22) РГАСПИ, 626/1/6/46.

(23) РГАСПИ, 626/1/6/47.

1926 年 3 月 28 日に 2 人の息子（チューリヒの工科大学を卒業してケメロヴォに向かおうとしていたヤン〔Jan〕とヤンのあとを追って同大学で学びはじめていたウィレム（ウィム）〔Willem (Wim)〕）に АИК-К に関する長文の書簡を書き送っている⁽²⁴⁾。その中で、興味深い箇所を 1 つだけ取り上げよう。

ロシアの経済学者たちは、全クズネツク炭田は 1 つの管理下にあるべきだとの意見である。……いまやそれ〔クズバス・トラスト管轄の北端の炭田〕は我々と結合し、それから全炭田が АИК-К の名の下に統合されるであろう。実際にはこの名称は、「コロニー」と何ら関わらないから、たぶんかなり無意味であろう。しかし、それはいまや全く歴史的になっている。我々は СТО の下にとどまり、意見の相違がある時、СТО のそばで訴える権利を絶えず持つ限りにおいて、自治は存続させられるであろう……

既述してきたように、創設以来余儀なくされていった「自治」の変遷をたどれば、「自治」は「СТО のそばで訴える権利〔上訴権〕」しか見られかねないという現状でのリュトヘルスの認識が率直に示されていると言えよう（この問題は第 3 章に続く）。それにしてもリュトヘルスのこの時点での認識にしては消極的すぎると見受けられるけれども、「全く歴史的になっている」と表現した彼こそ「初年度からの歴史に十分精通していた唯一の人であった」。それゆえに（АИК-К 清算決定後のことだが）「彼自身が入植者の個人的な契約の最終調整やこれらに対する財政的義務〔入植者の拠出金の払い戻しとか〕に関わり合っ」ていくのである⁽²⁵⁾。

モスクワからケメロヴォに戻ったリュトヘルスは、1926 年 4 月 14 日からベルリン事務局など宛に「化学工場の所長や他の人事問題について」の書簡を書いた。末尾には、「バルタの強い指揮の下」健康状態に用心して「6 月に再びモスクワ、7 月にオランダにいることを望む。残念ながら私〔リュトヘルス〕は十分な体力をつけられず、この事情を考慮しなければならない」と書かれていた⁽²⁶⁾。

「クズバス年譜」の 1926 年 4 月下旬頃の項に、以下が記されている。総務部長フートから私〔リュトヘルス〕は 1925/26 年度前半期についての報告および後半期のための見通しを受け取った。そこから経済的・財政的成果が見てとられる。新地区は計画が順調に実施され、すでに安定していた。「その一方でケメロヴォは徐々にいくぶん後退している。一部はスタッフと資金が新地区のために注力されたからであり、一部はふさわしい管理者が欠け、職員交代があまりにしばしばあったからである」⁽²⁷⁾。「ふさわしい管理者が欠け」

(24) Rutgers (Moskou) aanzijn zoons Jan en Wim (Zürich), 28.III.1926, in: *Nederlanders bouwen*, 186-188.

(25) РГАСПИ, 626/1/6/49-50.

(26) РГАСПИ, 626/1/6/48.

(27) РГАСПИ, 626/1/6/49. ちなみに、1925/26 会計年度の記録は、コロニーの活動においてかなりの発展を示した。すべてのケメロヴォの企業は収益良く機能していた。1925 年 12 月にコークス炉の第 2 バッテリーが運転しはじめた。АИК-К は自営の (self-supporting)

とは、言うまでもなくリュトヘルスの代理人の件であり、АИК-Кにとって深刻な問題になりつつあった。

(1925年9月25日のСТО会議においてАИК-Кの経済活動の成果を審査し、報告することを委任されていた) ВСНХによる報告は、結局7カ月遅れて1926年5月24日にСТОに提出された。АИК-Кの財政状況については1925年10月1日時点でのものであり、1924/25年度の報告となるそれを、以下抜粋する⁽²⁸⁾。

……〔1925年1月1日の〕併合の瞬間にАИК-Кは深刻な状態に陥った。と言うのは、当時存在していた石炭販売の危機だけでなく、クズバス・トラストの非常に緊迫した財政状態もАИК-Кに影響を及ぼしたからである。АИК-Кの経済状況は悪化したが、しかし〔上記40万ルーブリのうち〕1925年2月に受領した25万ルーブリの補助金がそれを再建し、操業の更なる客観的条件においてАИК-Кは比較的満足のいくものになった。〔以下の項目が続く。〕

〔1.〕炭鉱

①企業の稼働率；②採掘と経費；③自らの需要のための石炭消費量；④労働者数(1923/24年度に比べて1924/25年度は、労働者数は22%減で、3,450人までになった)；⑤産出量(比較的うまくいって、欠勤率も低い)；⑥労働生産性と賃金(月給は22 p.[ルーブリ] 25 k.[コペイカ] から33 p. 50 k. へ5割増；生産性は26%増)；⑦石炭の原価計算(1トン当たり8 p. 08 k. から7 p. 16 k. へと11%減)。

〔2.〕コークス化学製造

①コークスの焼き上げ；②労働者数(274人から513人と88%増)；③労働生産性と賃金(月給は20 p. 52 k. から31 p. 69 k. へ54%増)；④コークスの原価(1トン当たり19 p. 90 k. から16 p. 50 k. へと17%減)。

〔3.〕グリエフスク工場

①銑鉄の精錬；②液体燃料の消費量；③原価(1トン当たり66.4 p. から57.7 p. へと13%減)；④主要な出費；⑤1925年10月1日現在の収支(同収支はВСНХによって審査されたが、財務人民委員部はАИК-Кの特別な法的状態を引き合いに出しながら、その審査への参加を避けた。このためВСНХは自らの案で収支を提出し、この問題に関して財務人民委員部との意見の相違が生じうることに注意を払いながら、СТОに収支の承認を、財務人民委員部自体による収支審査結果の提出まで延期することを求める)。

以上、詳しい紹介は省かせてもらったけれども、(労働者数の変動がある中で)各種データは軒並み良い結果を出している。

「併合」後のАИК-Кが順調に発展しつつあることを、ВСНХは上記1926年5月24日

基盤を成した。Л.Ю. Галкина, *Автономная индустриальная колония «Кузбасс»* (Кемерово, n.d. [2011]), 133.

(28) “Деятельность АИК-К……(1922-1926),” 159-163.

付報告をまとめたことで確認したはずである。BCHX は、いまや CTO の 1924 年 11 月 12 日決議「[「全クズバス炭田での操業の統一への第一歩として」の併合であること謳っていた（第 5 篇, 18）]」の実行を完遂する時が来たと認め、1926 年 10 月 1 日からクズバスの全企業を“АИК-К”と名付けられた全ソ的企業合同体に統合することを提案した。そこで提案された統合は、あくまでもリュトヘルスらが主張し、ロシア政府諸機関に受け入れられてきた条件、つまり（タルレの表現を使えば）「CTO の直轄下、自治の維持、しかし BCHX の管理の条件付き」での「1922 年 12 月 25 日の新契約の基本的特徴を維持して国家企業合同体共通の立場で活動するであろう」ところの統合であった⁽²⁹⁾。

しかしながら、ゴスプランは 1 つの指導部（Кузбассом）が不可欠であるとの考えを支持して、“АИК-К”を基礎ではなく、新企業合同体の組織形態で全企業を統合する案を提起していた。ゴスプラン幹部会が 1926 年 4 月 16 日に採択した決議では、良質石炭の最大埋蔵量があり、極めて好都合に鉄鉱石採掘地が配置されていたクズネツク炭田は、ここに最大の石炭-冶金センターを創設するためのあらゆる基礎を備えている、と謳われていた。その時、ウラルとシベリアに新冶金工場を建設する大規模計画が活発に審議されていた。それは明らかに、クズネツク炭田内だけで企業操業を集約させる考えに立脚していた BCHX の提案とは対立していたのである⁽³⁰⁾。

早くも 1925 年春、通常企業合同体の地位にコロニーを移行する話が出ていたけれども、その時はコロニーは自治の維持が決定された（cf. 第 5 篇, 26）。しかし、と続けてタルレは言う。「自治的状态を“АИК-К”が自ら正当化することをやめる時が始まった。S.J. リュトヘルスでさえ再編が緊急に避けられないことを分かっていた。……リュトヘルスはあとになって『操業過程の中で、我々は自治からますます離れていった』と認めた」⁽³¹⁾。

このまとめは、АИК-К が「ロシア化」へ向かう流れに都合良く事を単純化したものである。実際はリュトヘルスらは、状況が変わるごとにそれらに反対したり、やむなく譲歩したりするなど対応せざるをえなかったものであり、それらの過程の中でこだわった主張およびそれに付された条件を、私は可能な限り追ってきているのであり、その最終局面は第 3 章で考察する。

以上略述し、軒並み良い結果を出した各種データも見てきたように、АИК-К の事業は 1925 年から 1926 年にかけて更に拡大・発展し続けたのである。その中で特徴的だったのは、1925 年初めに АИК-К は実際の「併合」に着手したばかりであるにもかかわらず、早くも次の「テリベス」計画実現に向けて行動を開始して、全クズネツク炭田の管理統合をめざし、最後まであきらめなかったことである。そのような АИК-К にとって、1926 年末の自らの清算決定は寝耳に水であったことは明らかだ（「テリベス」計画は清算後、実際にノヴォクズネツクの大製鋼所建設を皮切りに実現していく〔第 4 篇, 16〕）。

その清算決定に至る経緯は第 3 章で考察するけれども、本章で明らかになったのは、

(29) Тарле, *Друзья страны Советов*, 342-343.

(30) Тарле, *Друзья страны Советов*, 343.

(31) Тарле, *Друзья страны Советов*, 343-344.

АИК-К が СТО 直属から ВСНХ への移管が強まる中、実質的にゴスプランの計画の中に組み込まれようとしていたことである。クズネツク「炭田内だけで企業操業を集約させる考えに立脚していた ВСНХ の提案」は、リュトヘルスがめざした全クズネツク炭田の管理統合に沿ったものと考えられる。けれども「ウラルとシベリアに新冶金工場を建設する大規模計画」はゴスプランによる第 1 次 5 カ年計画で初めて実現していくのだが、元々 АИК-К はクズバスと北ウラル（ナジェジンスク工場）における産業労働者コロニーとして構想されたのであり、リュトヘルスがクズバスとウラルの近接性から 1922 年 10 月 31 日のゴスプラン幹部会会議で熱心に説きたいいわゆる「ウラル-クズネツク・コンビナート」計画は、その当時の経済・財政状況ではゴスプランに重く受けとめられなかったものであった（第 3 篇, 22）。このことを改めて銘記しておきたい。

第2章 リュトヘルス療養中の管理および通信体制

1925 年 6 月末頃、モスクワからケメロヴォに到着したリュトヘルスは約 2 カ月間、病を押して激務に耐えながら、自らの不在時に中断なく事業が営まれるためにあらゆることを予想し、組織することに努めた。つまり、リュトヘルスは自らの代理人としたカルニンに代わって、АИК-К のノヴォニコラエフスク事務局代表に抜擢されていた（第 5 篇，3）ロシエフ（В.А. Лосьев）を任命することにした。そしてロシエフを補助する諮問委員会（Raad van Advies）が設置され、委員となったのはダグラス（W. Douglas; 会計主任），ニエメッツ（Njemetz; ロシア出身のアメリカ人建築技師），そしてアントン・ストライク（後述）の 3 人であった⁽¹⁾。

実は、リュトヘルスはケメロヴォに向けてモスクワを発つ前、すでに 6 月 19 日時点でカルニンに代わる代理人を早くも検討していた。「私〔リュトヘルス〕はいまやニエメッツ，ことによるとロシエフを代理人として引き受けなければならないだろう」⁽²⁾。代理人がニエメッツではなく、ロシエフになった経緯については、リュトヘルスのバルタ宛 1925 年 7 月 8 日付書簡に記されている⁽³⁾。つまり、リュトヘルスはニエメッツを自らの助手として任命し、彼に仕事を任せるつもりであったが、しかし彼への反対が入植者側からかなりあり、結局、今夜ノヴォニコラエフスクに行くロシエフに、直ちに返って来るようにとリュトヘルスは命じた、と。それにもかかわらず、続く「その上、フートがここにまたなおいる。私〔リュトヘルス〕が去る際、ロシエフがそれを実行しなければならない」との文面からは、フートがいる限り、ロシエフではなくフートが実質的に助手の役割を果たしていたであろう。

2 人の代理人候補者に関して、母国に戻っていたバルタから以下のような 7 月 28 日付返信が来た⁽⁴⁾。「そちらのロシエフはやはりまた中途半端であり、ニエメッツはヨリふさわしくなく、そこでは今すでに彼への反対がある。この男は生涯を通じて優位に立とうとし、野心を持っている」。バルタは常日頃から夫から情報提供を受けていたのであり（ケメロヴォの婦人方からの情報もあったろう），また時に秘書的な役割をも担っていたからであろう⁽⁵⁾，夫に対して時としてブロンカのように直言していたようだ。

(1) РГАСПИ, 626/1/6/37; Trincer Rutgers/K. Trincer, *Rutgers*, 175; Тринчер/Тринчер, *Рутгерс*, 163.

(2) Rutgers (Moskou) aan zijn vrouw (Holland), 19.VI.1925, in: *Nederlanders bouwen*, 171.

(3) Rutgers (Kemerowo) aan zijn vrouw (Amersfoort), 8.VII.1925, in: *Nederlanders bouwen*, 173.

(4) Bartha (Holland) aan Sebald (Kemerowo), 28.VII.1925, in: *Nederlanders bouwen*, 174.

(5) Cf. 山内昭人『第3 インタナショナルへの道——リュトヘルスとコミンテルン創設——』（九州大学出版会，2021），280.

ついでに記しておけば、同返信に以下の推薦もあった。「技師 B.⁶⁾ を管理者として〔あなたの〕後任にさせたら。彼は製造者、技師、すでに長い実務〔アメリカでも〕があり、とても喜んでケメロヴォへ行くつもりだ」。このあと実際、1925 年末頃に“B.”ことベーゲマン (Begemann; 機械工学技師) は顧問技師として赴任し、ケムルドニク〔農場、病院地区〕の機械〔整備〕部長を引き受け⁶⁾、そして АИК-К 清算後、管理機関に残り、一時リュトヘルスの「代弁者」的な役割を果たしていく (次の最終篇)。

ストライクの選出に関しては、彼自身が兄ディルク宛 1925 年 8 月 9 日付書簡で、以下のように述べている⁷⁾。

リュトヘルスが彼の帰宅および彼の助手兼書記〔ブロンカ〕の死後、私〔ストライク〕をそのような少しでも彼の継続的な助言者として持つことを選んだのは明らかであった⁸⁾。管理者としての役割を果たすには、私はしかしまだあまりに若造だと感じ

(6) РГАСПИ, 626/1/6/42; cf. Tini Schoorl Straub, *Een beetje vrijheid. Herinneringen van een Nederlandse vrouw in Siberië* (Laren, n.d.[1965]), 21; Галкина, АИК-К, 138. なお、ベーゲマンの名前をスホール夫人は“H.P. Haverkamp Begemann”と、ガルキナはオランダ人“Павел Эгбертович”とそれぞれ記しているが、私自身は確認できていない。

(7) A. Struik aan zijn broeder, 9.VIII.1925, in: *Nederlanders bouwen*, 176-178; reprinted in: *Een Nederlander in Siberië. Brieven van Anton Struik* (Nijmegen, 1979), 57-61.

(8)それほどまでに期待されていたストライクの略歴を、以下の史料にもとづいて紹介しておこう。①〔技師ストライクに関する〕1926 年 12 月 20 日付証明書 (署名: 管理機関議長リュトヘルス, 総務部〔書記〕トゥロヴリナ〔Туровлина〕), РГАСПИ, 495/244/182/90; ② Biographie von A.G. Struik (モスクワ, 1936 年 3 月 9 日作成), РГАСПИ, 495/244/182/54-59 (独語); 495/244/182/60-65 (露語)。

1897 年 4 月 8 日生まれ。大戦中はデルフト工科大学学生で、1919 年に卒業して土木技師になるとともにオランダ共産党員となる。

1922 年 9 月から 1926 年 12 月まで АИК-К に勤務し、炭鉱の技術^{ビュロー}局^{ビュロー}の設計者、同次長、同局長を歴任 (その間、露語を習得)。1926 年秋に調査旅行でドンバス、イヴァノヴォ-ヴォズネゼンスク、モスクワに行く。(なお技術局は、技術とプロジェクト化の中核であるだけでなく、また経営の組織であり、管理のための基礎としての経営統計を責任を持って処理していた。РГАСПИ, 626/1/6/43-44. その意味でも、技術局長であるストライクへの期待は高かった。)

1926 年 4 月に着任したコロプキンによる翌 5 月の АИК-К 再編後、АИК-К 全企業の建設局長となる。同年、管理機関の 1 員となり、一度は管理者代理を務める。

1926 年末、ソ連共産党中央委員会による АИК-К の清算・再編決議後、辞任する。

その後、モスクワでトゥルキスタン-シベリア鉄道建設現場長シャトフ (В.С. Шатов) に誘われ、同鉄道建設に携わることになるが、その前に彼の了解の下、技師シャーマーホルン (後述) とともに鉄道建設に関する調査・研究のため 2, 3 カ月オランダとドイツを (休暇) 旅行する。

る。その上、私はまだ常に非常に片言の露語しか話せない。結局、我々はそれに最善を尽くした。つまり、ひとりのロシア系アメリカ人〔ロシエフ〕が管理者代理としての役割を果たすことになる。彼はノヴォニコラエフスクの我々の代表であつたし、党員で商人で、臨時で外界に対して責任を負っている。彼は皆が入植者で党員である 3 人評議会（会計主任ダグラス、建築技師ニエメツツ、そして私）の管理の下に入る。……この方〔リュトヘルス〕は、予算案を持って政府の承認を取ってくるためにノヴォニコラエフスク、そしてモスクワへ向けて今再び出発した。

リュトヘルスはロシエフについて事あるごとに書簡で不満を吐露していたにもかかわらず、彼を選んだ決め手はこの「ロシア系アメリカ人」であつたろう。リュトヘルスがストライクに期待をかけたのも、彼がリュトヘルスの後輩で技師兼共産主義者であるだけでなく、露語を速習していたからであろう。ここでもブロンカの果たした役割がいかに大きかったかと思ひ起こされる。なお、上記の諮問委員会がここでは「3 人評議会」(Raad van Drie)と表記され、代理人はその管理下に入ると捉えられている。と言うことは、後者の方が権限が重いように見られる。リュトヘルスにも両方の表記があるけれども、後者の方が実情に近いのではないか。

1925 年 8 月 6 日にリュトヘルスはケメロヴォからノヴォニコラエフスクに到着した。翌 8 月 7 日にリュトヘルスはバルタに報告している⁽⁹⁾。

昨晚〔8 月 6 日〕、私〔リュトヘルス〕は技師 B.と一緒に到着した。2 日後、フートが 1925/26 年度の予算案と計画のための残りの資料を持って来る。それは日曜日〔8 月 9 日〕であり、それから木曜日〔8 月 13 日〕にフートと私はモスクワに行き、技師 B.は（たぶん 2 週間後にまたモスクワに追加資料を持って来るために）ケメロヴォに戻る。

リュトヘルスはモスクワに 1925 年 8 月 22 日か、その直前に到着し、8 月 29 日にバルタに報告している⁽¹⁰⁾。

私〔リュトヘルス〕は今ここでベルリン、ニューヨーク、そしてケメロヴォとのあらゆる通信を片付け、一部の会合（その他の会合はフートによって引き受けられた）に出席し、『プラウダ』のためにテリベスに関する 1 論文を書いた。そしてアメリカの新聞雑誌など^{プレス}に対してもう 1 つ書くだらう。……要するに私は、あまりに悪い状態

(9) Rutgers (Nowo Nik.) aan Bartha (Holland), 7.VIII.1925, in: *Nederlanders bouwen*, 175. 引用文中の“B.”はバールス (A. Baars) のことであり、「クズバス年譜」ではほとんど頭文字だけで済まされている。彼が АИК-К 清算後、共産主義から離反していったからであろう（最終篇で改めて取り上げる）。

(10) Rutgers (Moskou) aan zijn vrouw (Holland), 29.VIII.1925, in: *Nederlanders bouwen*, 179; cf. Rutgers (Moskou) aan D.J. Wijnkoop, 22.VIII.1925, ПГАСПИ, 581/1/47/140; 第 4 篇, 15.

でオランダに帰らないことを願って、私の安静療法をここですでにいくぶん始めている。

モスクワでのリュトヘルスの主要な仕事は、「併合」により増額された АИК-К の 1925/26 年度予算折衝であった⁽¹¹⁾。その予算折衝も、第 1 章でリュトヘルスのバルタ宛 1925 年 10 月 1 日付書簡を引用したように、病状に気をつけながらであり、予算承認を待たずの帰国であった。帰国後もリュトヘルスは、BCHX やゴスプランの多くの会議で、いつリュトヘルスは戻ってくるのかと尋ねられたけれども⁽¹²⁾、それほど失礼せざるをえないほどの病状だったと言えよう。リュトヘルスは 10 月上旬にモスクワを発ち、10 月下旬に帰国する⁽¹³⁾。

リュトヘルスは 1925 年 11 月からハーグの医者にかかり、糖尿病のインスリン治療を始め、一時期ベルギーのショフォンテーヌ (Chaudfontaine) で座骨神経痛の温泉療養に専念もした。その間、バルタとともに 1926 年 2 月 15 日にオランダを発ち、2 月 23 日にモスクワに戻るまで、リュトヘルスは、モスクワ、ケメロヴォと頻繁に通信した。リュトヘルスがアメルスフォールの自宅から出した書簡は、最初のは 1925 年 10 月 26 日であり、最後のは 1926 年 1 月 25 日〔とあるが、実際には 2 月 11 日〕である。取り扱われた事項は、入植者のための新規定、専門技師の採用、ケメロヴォに対する一連の技術・組織的問題とのことである⁽¹⁴⁾。

フート、ストライク、バールス、ロシエフらから「絶え間なく最新の情報が提供された」リュトヘルスは、ケメロヴォおよびモスクワでの出来事を詳しく察知できたし、指示が求められもした。特にモスクワ事務局のフートとの通信が重要で、フートは関係書類の写しも送付した。フートはこの時期、非常に重要な財政的問題に大いに能力と忍耐を示した。「〔ロシア共産党〕中央委員会がコトリャレンコ (Д.М. Котляренко) にケメロヴォの仕事を引き受けることを提案した」時、「しかしフートはそれを拒絶し」、代わりに (リュトヘルス宛 1925 年 11 月 17 日付書簡で) リュトヘルスによって代理人に任命された「ロシエフを管理委員会の第 3 委員として迎え入れることを提案し」さえした。

ところが、書簡のやり取りの中で、ロシエフが管理者として適任でないことが明らかになった。彼は外国人〔入植者〕といつてもうまくやっていたわけではなかった。それどころか、「彼については、党および労働組合諸機関によって嘆かれていた。彼はいかなる権威も持たず、我々は我々の威信を失っている。彼自身が仕事を成し遂げることができない

(11) Cf. Trinchet Rutgers/Trinchet, *Rutgers*, 175; Тринчер/Тринчер, *Рутгерс*, 163.

(12) РГАСПИ, 626/1/6/41.

(13) Rutgers (Moskou) aan zijn vrouw (Amersfoort), 1.X.1925, in: *Nederlanders bouwen*, 181; РГАСПИ, 626/1/6/42.

(14) РГАСПИ, 626/1/6/42, 45. なお、この段落から 4 つの段落は、ほとんど「クズバス年譜」によるものだが、時系列に沿わず込み入ったり、具体的説明に欠けたりした箇所も目立ち、整理し直しての記述であることを断っておく。

ことを認めている」。

フートはリュトヘルスが 1926 年 1 月に戻ってくることを望んでいたけれども、健康状態がなかなか好転しなかったリュトヘルスは、コトリャレンコとフートに以下のような〔ロシエフの交代を前提とした〕書簡を書き送ることになった。「彼〔リュトヘルス〕は АИК-К の運営の重荷をヨリ好んでもう一度背負い込むことを欲しない。すべてが調整されていて、コロニーの見通しが明るい今こそ、運営を他人の手に委譲する適切な時機である。将来の指導者を最初は代理人として働かせよ、そののち彼は彼のポストに踏み留まることができる」⁽¹⁵⁾。

そのように心境を吐露したリュトヘルスが、病気の完治まで母国に留まるわけにはいかず、モスクワに戻ったのには事情があった。カルニン解任後、ロシエフを代理人とした調整が 3 人評議会の管理下で満足のいくものではないことが明らかとなり、同問題の決着をつける必要に迫られたからである⁽¹⁶⁾。

1926 年 1 月 4 日付書簡（極秘）に、リュトヘルスはコトリャレンコとフートに 2 月に戻るとそれぞれに書いたのだが、「全経営を引き受けることはできないだろう」とリュトヘルスは念押しするものの、早くも以下のような考えを披瀝している⁽¹⁷⁾。

私〔リュトヘルス〕は、我々の〔いわゆるロシア化に与しない〕孤立化を放棄することを提案し、技師ベーゲマンが良きロシア人助手とともに管理を引き受けることができるであろうとの意見である。この場合、私の方は助言技師として更に協力し、ケメロヴォ、モスクワ、そしてオランダで交互に時を過ごす覚悟があることを表明するだろう。シベリアに向いている人を見出すことが今は重要だ。フートがあつらえ向きであろうが、しかし彼はモスクワにとって不可欠だ。

ベーゲマンの推薦は、該当する能力だけでなく、上記のように最近ケメロヴォにやって来て、これまでの「しがらみのない」人物であったからではないか。それよりも着目すべきは、リュトヘルスが病状が好転しない中、「助言技師」として協力を申し出ていることである。

リュトヘルスはバルタとともに 1926 年 2 月 23 日から 3 月 31 日まで（当初考えていたより長く）モスクワに滞在することになった⁽¹⁸⁾。その間、2 月 28 日にリュトヘルスは、とりわけロシエフに次のように書く。最近ケメロヴォの管理者として認められなくなった

(15) РГАСПИ, 626/1/6/38-40, 42; Verkort overzicht Biografie Ir. S.J. Rutgers en B.E. Rutgers-Mees, 12, in: Archief S.J. Rutgers, [former] Map I-1; Trinchet Rutgers/Trinchet, *Rutgers*, 175-176; Тринчер/Тринчер, *Рутгерс*, 163-164. 末尾の引用文は、「クズバス年譜」ではなく、『リュトヘルス伝』による。

(16) РГАСПИ, 626/1/6/45-46; *Nederlanders bouwen*, 182.

(17) РГАСПИ, 626/1/6/45.

(18) РГАСПИ, 626/1/6/45-46; cf. *Nederlanders bouwen*, 186.

ロシエフに対して「2 カ月の休暇が許可される。この休暇終了後、彼はノヴォニコラエフスク事務局を〔再び〕管理し、もはやケメロヴォに戻るべきではない。私〔リュトヘルス〕のケメロヴォ到着まで、チェーザリ（Cesari; Чезари）がそこで管理を受け入れるだろう」⁽¹⁹⁾。

ケメロヴォに向かう前にリュトヘルスは、ピャタコフがドンバスから戻るのを待った。リュトヘルスは「詳細はつかめないが、上述のように」すでに АИК-К の ВСНХ との関係の規定についてすでに協議し、合意していた。リュトヘルスはピャタコフと会い、ふさわしいロシア人管理者選考を最終的に手助けするようピャタコフを急かした。後者は前者に、自らの協力を約束し、同志コロプキンをドンバスから解放してもらうことができるかどうかを試みるつもりだと言った（「オランダ人の建設」による説明によれば、ピャタコフはコロプキンを助手として、可能ならばリュトヘルスの代理人としてクズバスの仕事のために得ようとすることを提案した）⁽²⁰⁾。

結局、ピャタコフの推薦を受けた СТО が、リュトヘルスの新たな代理人にコロプキンを任命した。ピャタコフはロシア 10 月革命前からキーウ・ボリシェヴィキ指導者として活動し、1921 年 12 月にウクライナからモスクワに戻る前にはドンバスでの経験〔ドンバス石炭産業理事長など〕があり⁽²¹⁾、彼による推薦はいわば素人による推薦ではなかったろう。にもかかわらず、「クズバス年譜」には任命される「コロプキン」のあとの丸括弧内に次の文章が加えられていた。「〔国内戦期に〕ゲリラ隊員としてピャタコフとともに戦ったが、しかし管理者としては証明されていなかった」と⁽²²⁾。

コロプキンが代理人としてケメロヴォに赴任したあとの問題は、章を改めて取り扱うことにする。

(19) РГАСПИ, 626/1/6/46. チェーザリはプロコピエフスク指導者で、南部グループの中に留まることを欲していなかった。РГАСПИ, 626/1/6/43.

(20) РГАСПИ, 626/1/6/46; *Nederlanders bouwen*, 183. 上述のように、その時議論の対象となった「ロシア人管理者（場合によってはコロプキン）」など 4 項目を、リュトヘルスはピャタコフ宛 1926 年 3 月 10 日付覚書に書き留めている。

(21) Graziosi, “«Building the First System.....»,” 540; Галкина, *АИК-К*, 123, 133.

(22) РГАСПИ, 626/1/6/46 (強調引用者)。

第3章 コロプキン問題と「クズバス」の清算

リュトヘルスはモスクワからケメロヴォへ向かう 6 日前の 1926 年 3 月 25 日に СТО 議長ルイコフらがわざわざ署名し、発行した「СССР の全国家機関は、同志〔АИК-К 管理機関議長〕リュトヘルスに彼の任務に委ねられた執行に際して、ありとあらゆる援助を与えることを促す」との証明書（有効期限の記載なし）を受け取った⁽¹⁾。それを携行したリュトヘルスは、バルタが付き添って、ノヴォニコラエフスク経由でケメロヴォに到着した。早速、リュトヘルスは入植者との集会を催させ、新しい状況とピャタコフとの合意を話し、代理人にコロプキンがなったことを通告した。「かなり激しく討議される（私の報告と討論についての短い鉛筆書きメモを見よ）」とあるものの、詳細は「クズバス年譜」には記されていない⁽²⁾。

1926 年 4 月 1 日、リュトヘルスの管理者代理にコロプキン（共産党員）が任命された⁽³⁾。コロプキンは家族を連れて 4 月 20 日にケメロヴォに到着した。その際、ドンバスから 5 人の技術スタッフを同伴したのだが、それはコロプキンが付けた受諾条件だった⁽⁴⁾。コロプキンは個人的に知っている良きロシア人専門技師を得ることができると主張するので、リュトヘルスはアメリカとドイツでの技師募集を制限できると考え、訪ソ直前のニューヨーク事務局代表バーカー（T. Barker）に対して、モスクワ到着まで何も企てるな、と打電さえした⁽⁵⁾。コロプキンが連れてくる部下は最終的には 40 人になるのだが、そのうちロシア人主任技師クラスの年俸は、同クラスのアメリカ人の 2 倍にあたる 2 万ルーブリであった。それは温暖な気候のドンバスから厳冬の、しかも流刑地と依然みなされていた土地への赴任であるという理由が付けられてのことだった⁽⁶⁾。

リュトヘルスのコロプキンへの人物評価は当初、カルニンの時と同様に（第 5 篇, 24），以下のようにあまりに甘すぎるのではないか。用心のために人を猜疑の目で見る気配が全くと言ってしない。「コロプキンと私〔リュトヘルス〕はかなりうまくやっている。……我々は様々な外国人同志の特別な価値や仕事仲間の最良の配置などについて多くを話し合う。その際、ほとんど争いは生じない。彼はすべてに同意し、一連の措置を講じる用意があると表明する」。このあと丸括弧内に「ヨリ遅くなって、彼は彼の約束のただ 1 つでさえ行わなかったことが明らかになった」と付け加えている⁽⁷⁾。ルース・ケネル（Ruth E.

(1) РГАСПИ, 626/1/11/17; Галкина, АИК-К, 63.

(2) РГАСПИ, 626/1/6/48.

(3) Тарле, *Друзья страны Советов*, 344.

(4) Trincer Rutgers/Trincer, *Rutgers*, 176; Тринчер/Тринчер, *Рутгерс*, 164.

(5) РГАСПИ, 626/1/6/48-49.

(6) R. Kennell, "The End of Kuzbas," *The Nation*, Vol. 128, No. 3318, 6.II.1929, 171.

(7) РГАСПИ, 626/1/6/49.

Kennell) は言っている。「リュトヘルスの顕著な弱点は人物を判断できなかったことであつた——彼は……ブロンカの尋常でない直感に常に頼ってきた。しかし、哀れで熱烈なブロンカは逝ってしまっている」⁽⁸⁾。

1926 年 6 月初め、リュトヘルスは 2 カ月間のコロプキンとの共同作業を経て、準備万端整えられたと見て、モスクワ経由で帰国する予定でケメロヴォを発った⁽⁹⁾。最初の中継地ノヴォニコラエフスクでリュトヘルスは、仕事の調整をするためコロプキンと一緒にいた。「しかし」と「クズバス年譜」ではコロプキン批判が続く。「その頃すでに彼は私〔リュトヘルス〕に尋ねることや知らせることなしに彼自身の道を行くことが明らかになった。党〔地区委員会〕書記との協議において、例えばドンバスから連れて来た数人の専門技師の高給報酬も査定されたが、たいがい彼はこれまでの成果の信用を失わせようとすでに試み、そしてごく短い期間で最大限の成果を随所で約束した。『彼の』部下は児戯に類する (Kinderspiel) にすぎない。シブレヴコムシブレヴコムの拡大会議における報告後、またすでに様々な方面から АИК-К への鋭い批判がなされ、その際コロプキンは我々を完全に見捨てた。私は〔ブロンカはもはや居らず〕いかなる代弁者も連れてこなかったのもので、その攻撃を半分しか理解できず、私はわずかな抵抗に限定しなければならなかった」⁽¹⁰⁾。

リュトヘルスはモスクワから帰国直前の 1926 年 6 月 30 日に、АИК-К 総務部長フートと書記トゥロヴリナによって署名された以下の証明書を与えられた。「АИК-К 管理機関の決定にもとづいて彼〔同議長リュトヘルス〕は、我々の鉱山と工場のための設備購入に関する問題を解明するためにドイツ、フランス、ベルギー、オランダに派遣される」。それは有効期間が 1926 年 7 月 1 日～1927 年 1 月 1 日となっており、リュトヘルスの半年間の治療を想定してのものであった⁽¹¹⁾。

1926 年 7 月 10 日時点で、リュトヘルスはベルリンに滞在しており、そこではベルリン事務局代表クラスニャンスキーが亡くなり、その対応に追われた。7 月 15 日、その後任にバールスを据えることになった⁽¹²⁾。

1926 年 7 月 20 日か、その直前にリュトヘルスは帰国した。彼はモスクワとケメロヴォの同僚と通信を続けた。リュトヘルスにしきりと訴えられたのは、コロプキンによる管理への不安と懸念であり、またリュトヘルスの即座の復帰であった⁽¹³⁾。7 月 20 日にリュト

(8) Kennell, “The End of Kuzbas,” 171.

(9) Trincer Rutgers/Trincher, *Rutgers*, 176; Тринчер/Тринчер, *Рутгерс*, 164.

(10) РГАСПИ, 626/1/6/50. 「随所で約束した」に関しては、コロプキンはクズネツク炭田の管理の再組織プロジェクトでもってしばしば地方新聞等に意見を述べた。がしかし、外国人労働者・専門技師のコロニーでの活動やリュトヘルスの役割について全く言及しなかった。Тарле, *Друзья страны Советов*, 344.

(11) РГАСПИ, 626/1/11/18.

(12) РГАСПИ, 626/1/6/51-52: *Nederlanders bouwen*, 182; Галкина, *АИК-К*, 204. バールスの肩書きは АИК-К 臨時全権となっている。Archief A. Baars, Map 211, IISG.

(13) Trincer Rutgers/Trincher, *Rutgers*, 177; Тринчер/Тринчер, *Рутгерс*, 164.

ヘルスはケメロヴォのストライク宛に書簡を書いた。それはストライクの気分が（シャーマーホルン〔D. Schermerhorn〕⁽¹⁴⁾と同様に）かなりペシミスティックな書簡への返信だった。「私〔リュトヘルス〕の当時の印象では、コロプキンはやはり外国人を手放さないつもりだし、彼らが適合すべきであると駆り立てている。私にはスタッフが欠けており、コロプキンとの妥協が図られなければならない。……明確な指示をコロプキンはピャタコフから受け取っていなかったが、しかし彼には外国人と仲良くする責務がある。彼は一度アメリカに行くならば良いだろう。そこで彼は大いにやる気を得るだろう」⁽¹⁵⁾。

リュトヘルスはフート宛 1926 年 7 月 21 日付書簡の中で、7 月 27 日に座骨神経痛療養のためショフォンテヌの温泉場に行くことを伝えている⁽¹⁶⁾。彼が当地にいつまで滞在したかは分からないが、アメルスフォールトに戻って、8 月 12 日に技術的な出来事について 2, 3 の書簡を書いている。彼の方も 2, 3 の入植者からの書簡とモスクワからの電報を受け取り、しきりにモスクワに戻って来ることを懇願された⁽¹⁷⁾。ニューヨークからモスクワに来ていた（第 4 篇, 17）バーカーからも、「今コロプキンはすっかり羽目をはずしている。……もしもあなた〔リュトヘルス〕が旅することができれば、すぐにモスクワに来ることが必要だ。フートとコトリャレンコも同意見だ」との 8 月 9 日付書簡を受け取った⁽¹⁸⁾。

ストライクはリュトヘルスに 1926 年 8 月 27 日付書簡で次のように訴えている⁽¹⁹⁾。

コロプキンは反革命的スペッツの手中にいる。彼らを野に放つか、それとも外国人共産主義者が指導すべきか？ いずれの妥協も不可能だ。……管理部門はすでに 80 から 148 人に増え、その下で全くの山師たちが完全に過剰になっている。コロプキンは今モスクワに行っている。彼が管理機関の議長として戻って来る時、最良の外国人構成員は立ち去る（それほどまでになっている）。党はコロプキンへの反対を決定する、そうすれば我々はスペッツの支配なしに АИК-К での最後の実験をするようになる。

ハーン（S. Hahn; 用度管理者）も翌 8 月 28 日付書簡でリュトヘルスに、「コロプキンは

(14) 1900 年生まれの建築技師。シャーマーホルンが 1924 年夏に歯科医の妻とともに АИК-К に向かうことになった最初のきっかけは、1922 年初めにリュトヘルスがデルフト工科大学で АИК-К の入植者募集のために講演したのを聴講し、そこに彼の未来があると知ったからであった。技術局の責任者として建設・設備修理だけでなく、西欧での装備品調達を担当した。H. Olink, *De vermoorde droom [Drie Nederlandse idealisten in Sovjet-Rusland]* (Amsterdam, 1993), 93-95.

(15) РГАСПИ, 626/1/6/51. その実現しなかったアメリカ行計画については, cf. 第 4 篇, 18-19.

(16) РГАСПИ, 626/1/6/52.

(17) РГАСПИ, 626/1/6/54.

(18) РГАСПИ, 626/1/6/52.

(19) РГАСПИ, 626/1/6/53.

今、外国人なしに、またあなたやコトリャレンコなしに事を進めることを強く考えている」と書いている⁽²⁰⁾。

ストライクも、そしてハーンも、妥協はすでにもはや不可能だとみなしていた⁽²¹⁾。それに対して、リュトヘルスは「完全にロシア的状况下だが、コロプキンは外国人を留め置くことができるようにする責任があると想定し、この進展にまた参加することを強要し」、なおコロプキンへの期待をつないでいた⁽²²⁾。

翌 8 月 29 日に書かれたストライクの兄宛の書簡を抜粋・紹介しておこう⁽²³⁾。

- ・リュトヘルスはこの体制の始まりに際して、それ〔ロシア 10 月革命後の国内戦期にパルチザンとして活躍したコロプキンによる体制〕はロシア革命の深い理解を得るためにとても良い、と父親のように言った。しかし、その深い理解はその場合には受け入れられない。

- ・リュトヘルスは、我々の事業がこの発展を経験し、その仕事がここで実際に止められていることを全く良く知っている。しかし、彼が今回この展開を阻止する力を持っているかどうかを私〔ストライク〕は疑う。彼は実際のところあまりに少なすぎる助力者しか持っていない。それにもかかわらず闘いが、おそらく決戦が彼に押しつけられている。我々の赤い管理者〔rode directeur; コロプキンを指す〕は全事業を彼（つまり「スペッツ」）の手中に収めようとするために十分力があると感じていた。かくして彼はリュトヘルスの信用を失わせるようにしたいようだ。

- ・コロプキンは大急ぎでモスクワに呼び出された。そこにはリュトヘルスが目下いる。私は妥協なしに 1 つの決定に至ることを望む〔下記参照〕。

以上紹介したように、現地から次々と送られてくる情報に接して、リュトヘルスは長期療養を中断してでもモスクワへ向かうことを余儀なくされた。1926 年 8 月末にモスクワに着いたリュトヘルスは、直ちにコロプキンをケメロヴォから呼び寄せ、コトリャレンコとフートを加えて 4 人で、以下のように様々な問題を広く話し合った。「コロプキンは改めて全面的に同意する。リュトヘルスは АИК-К は時が経てば 1 ロシア・トラストに変わらなければならないことを強調する。それはまた彼らの目標である。管理上の課題は、АИК-К をソヴェト企業の全般的〔経済〕システムに移す手助けをすることであった。しかし、ここで必要なのは、その組織におけるすべての良いもの、入植者たちが保持することを貫き通してきたすべての進歩的で合理的なものである。／そこでシボルト〔リュトヘルス〕、コロプキン、コトリャレンコ、ストライクの新しい管理機関が組織されることになる」⁽²⁴⁾。

しかし、この管理機関は機能しなかった。このあと出国して 1926 年 9 月下旬頃からス

(20) РГАСПИ, 626/1/6/53.

(21) Cf. *Nederlanders bouwen*, 184.

(22) РГАСПИ, 626/1/6/54.

(23) Anton Struik aan zijn broeder, 29.VIII.1926, in: *Nederlanders bouwen*, 190-191.

(24) Trinchet Rutgers/Trinchet, *Rutgers*, 177; Тринчер/Тринчер, *Рутгерс*, 164-165.

ロヴァキアのピェスタニ (Piešťany) で療養中の (第 4 篇, 18) リュトヘルスのもとに届いた複数の書簡が, そのことを次のように知らせた。「コロプキン, モスクワ [での協議] で私 [リュトヘルス] にした彼の約束を守らない。彼は一度も新しい 3 人管理委員会 [リュトヘルスを除く] を招集せず, またストライクにこの決定を通知していない」⁽²⁵⁾。

1926 年 9 月 1 日にまだモスクワにいたリュトヘルスは, ストライクに書いた。「我々は 1 ロシア・トラストになるべきだが, しかし外国人スタッフと少数 [精鋭] の官僚組織とともにである。私 [リュトヘルス] はすべての苦情を調査したが, しかしコロプキンが系統的に外国人を遠ざけているとは納得しない」⁽²⁶⁾。

1926 年 9 月 7 日, ストライクはリュトヘルスに返答した。リュトヘルスは「状況を正しく判断していない。つまりコロプキンは, 彼の代理人としてのゴリャチェフ (Gorjatscheff) とともに権力だけを欲している」。「ストライクは АИК-К に戻るつもりはないが, しかし我々はこの乱脈経営を無為に傍観することはできない」⁽²⁷⁾。

翌 9 月 8 日にリュトヘルスがストライクへ書いた長文書簡には, こうある⁽²⁸⁾。

2 つの問題, つまり外国人の共同作業 [の問題] とスペッツと管理全般の問題は区別されなければならない。私 [リュトヘルス] の意見では, 党に属さないスペッツ, 党, および労働組合管理等とともに管理のロシア方式への完全な移行は, しかし外国人の協力下での良き成果のもとでのことである。それはユートピアか? 我々の孤立化は危険な実験となる。……

……私がまだ管理者として留まっている時でさえ, コロプキンは引き続き実際に管理するだろう。全体の管理のためには私にスタッフが欠けている。BCHX は以下の構成の管理委員会に同意した。つまり, リュトヘルス, コロプキン (第 1 補佐), コトリャレンコ (第 2 補佐), ストライク, そしてヴェルチノフ (Wertchinoff)⁽²⁹⁾ [の委員] と候補としてゴリャチェフ。それは СТО に提案されるだろう。もしもそれをあなた [ストライク] が試みるならば, その際何も失わないだろう。その作業はほとんど神経をすり減らさないだろう。

続いてリュトヘルスは 1926 年 9 月 21 日の詳細な書簡で, ケメロヴォに向かって書いた。以下, 原文ではなく, 長くて改行なしの文章だが, 適宜改行して抜粋する⁽³⁰⁾。

(25) РГАСПИ, 626/1/6/57.

(26) РГАСПИ, 626/1/6/55.

(27) РГАСПИ, 626/1/6/57. ゴリャチェフは同年 6 月に炭鉱の技術指導者になっていた。

РГАСПИ, 626/1/6/51.

(28) РГАСПИ, 626/1/6/56-57.

(29) 次に抜粋する史料では, ヴェルシニク (Wersjinik) とあり, どちらが正しいか未確認。

(30) РГАСПИ, 626/1/6/58-60.

私〔リュトヘルス〕は、当初ストライクとシャーマーホルンが АИК-К の〔ロシア化に反対して〕「孤立化」を続けることを欲しているとの印象を持った。今私は再びより明瞭な像を持つ。我々の根拠地もまたロシア生活の中で全般的に弱められていることは軽視されるべきではない。ノヴォニコラエフスク〔の党〕ももはや我々を支持せず、中央の党はもはや細部にわたって関わり合うことができない。敵対的なスペッツの絶え間ない組織的攻撃は、また我々の友をぐらつかせる。私は我々の固執によって最終的に СССР の全般的利益を損なうことを恐れる。コロプキンの問題は私にとっては二義的な意義であった。……

私がケメロヴォに向かったならば、それはすべてを極端なまでに駆り立てることを意味したであろう。それは早すぎたか、それとも遅すぎたかであろう。私がモスクワに到着する以上のことは不可能だったろうし、私のスタッフは十分ではなかったろう⁽³¹⁾。

コトリャレンコ、フートラへの攻撃を私は払いのけたし、1つの管理機関、つまりリュトヘルス、コロプキン、コトリャレンコ、ストライク、そしてヴェルシニク（Wersjinik）が承認された。もしかすると私は「候補」としてのゴリャチェフを拒絶しなければならなかっただろうが、しかしツュバレフ（Tsjudareff）はこの候補を強く支持した。と言うのは、ゴリャチェフは場合によっては片寄った意見を記録^{プロトコル}することができる時、より大きな責任を得ていたからである。また私なしでは彼らが管理委員会で多数を占める。……私はコロプキン、ツュバレフと交代したので、ヴェルシニクを知らないが、しかし彼は信頼できる同志のように見え、そしてコトリャレンコは（あなたが知るように）全く利己的でなく、腹藏もなく、しかも控えめである。

スペッツとの関係はより重要である。と言うのは実際の成果は彼らに左右されるから。これら〔の成果〕は新体制下では不都合であり、АИК-К が達成したものすべてが今、批判され、減らされはじめている。……

人事問題は極度に重要である。……ハーンは無条件に引き留められるべきである。私は経営に参加し、それが有益でありうる限り、そうする用意がある。以前、私は仕事が私の力に余っていたので、何度も退こうと思った。シャーマーホルンはとにかく休暇からケメロヴォへ戻るべきであろう。私は10月30日に〔療養地ピエスタニを離れて〕オランダに、そして〔1927年〕1月15日にロシアにいることを考慮に入れている。

末尾の予定日にあるように、リュトヘルスはよもや3カ月後に АИК-К が清算されるとは思いません、来年の仕事まで考えていた。

(31) この箇所は、モスクワまで来ていたリュトヘルスが、なぜケメロヴォへ向かわなかったかの説明だが、モレイは典拠なしに、「モスクワ滞在中にリュトヘルスは諸問題についてコロプキンと話し合い、ケメロヴォを訪れない方が良いだろうと考え、帰国した」と説明している。Murray, *Project Kuzbas*, 172. モレイのこのあたりの記述には、このように典拠なしで、説明不足の文章が散見する。

1926 年 9-10 月、ピエスタニないしオランダで治療していたリュトヘルスのもとに、再びケメロヴォから不安にさせる書簡が届くのが続いた。「農業-畜産業が〔コロプキンによって〕清算されている」,「〔生産効率の悪化により〕賃金が下がり、支払が滞っている」,「コロニーの資産は浪費されている。金はコロプキンと彼のドンバスからのスペッツの個人的必要に使われている。……あなた〔リュトヘルス〕は時々来ることを決めなければならない」とか⁽³²⁾。フートからは 10 月 16 日に深刻な現状が以下のように報告された。

この 2, 3 カ月ケメロヴォでは外国人のひとりとして指導職に留まっていなかったろう。コロプキンは「農場」を放棄した。人民委員会議は、実際にすべての外国人が АИК-К を立ち去りつつあるので、自由貿易のための許可を拒んでいる。……ケメロヴォでは外国人は依然として立ち去っている。例えばシュトメル (Stommel; ドイツ人コークス専門技師で、マーラー〔W.H. Mahler〕化学工場主任技師の後任)^{プラント}、ハーン、ディカー (E. Dikker; オランダ人化学技師) らは去るであろう。その消失はヨリ少なくないだろう。非公開の党会議において全入植者がコロプキンらへの反対を語った⁽³³⁾。

1926 年 10 月 4 日には АИК-К の簿記および会計報告書が、早くもソヴェト方式に移行した⁽³⁴⁾。その翌日にリュトヘルスは、ピエスタニからコトリャレンコへ以下の書簡を送った⁽³⁵⁾。

コロプキンは、モスクワでの我々の申し合わせにもかかわらず、ケメロヴォの臨時管理委員会を全く招集してきていない。しかし、このやり方では共同作業は完全に不可能である。ふさわしい調整は、外国人を引き留める我々の最後の望みを意味したし、同志コトリャレンコが〔党〕中央委員会ないし ZKK (党中央統制委員会) と提携して調査委員会を要求することを私〔リュトヘルス〕は提案する。もしかするとソローキン (Sorokin) がそのような委員会に所属できるかもしれない。それについては同志コシオール (С.В. Косиор; 党中央委員会書記) やラストプチンと話せよ。さもないと、我々は СТО に、我々が責任を拒否することを報告しなければならない。

(32) Trincher Rutgers/Trincher, *Rutgers*, 177; Тринчер/Тринчер, *Рутгерс*, 165.

(33) РГАСПИ, 626/1/6/61. 同じ会議かは不明だが、クズバス-外国入党指導者が全員出席した党地区委員会の会合では、ストライクが事業の管理移譲に激しく反対したが、ファン・ドレーン (K. van Dooren; ベルギー人共産主義者で機械工場技師) だけはその時支配している状況を理由に管理移譲に賛成している。Nederlanders bouwen, 195. なお、農場の放棄に関して、農場は 1925 年が「最初の成功年」で、8,438 ルーブリを稼いだ (Галкина, АИК-К, 133) けれども、1926 年 9 月初めにはすでに農業-畜産業は清算されており、それは АИК-К の自給自足の原則を崩したことになる。

(34) Галкина, АИК-К, 130.

(35) РГАСПИ, 626/1/6/60.

ピエスタニからオランダに戻っていたリュトヘルスは、1926年11月5日にクイブィシエフ（В.В. Куйбышев; 党中央統制委員会および労農監督部議長だったが、ВСНХ議長ジェルジンスキーの1926年7月20日死去に伴い後任になっていた）宛に詳細な電報を打ち、「コロプキンが彼の約束を果たしていないので、彼の解任を〔後述するクイブィシエフ委員会のために〕提議した」。翌11月6日にリュトヘルスはコトリャレンコとフート宛書簡で、その打電を知らせ、以下を続けた。「私〔リュトヘルス〕は、コトリャレンコがケメロヴォに行き、私が〔党中央委員会での会議への呼び出しに応じて年末に発ち、1927年〕1月にモスクワに来ることを提案する。1926年3月の〔上記〕同志ピャタコフとの調整がАИК-Кの更なる前進のために役立つ。それはまたクズバスへの国際的共感ゆえに期待されている」⁽³⁶⁾。

「クズバス年譜」は続いて「АИК-Кの問題は2, 3週間のうちに〔党〕中央委員会で取り扱われるであろう。コロプキンとストライクはその時モスクワにいるだろう」とある⁽³⁷⁾。また、1926年11月13日にリュトヘルスは、ニューヨークのシップマン（S.S. Shipman）から受け取った10月28日付書簡（cf. 第4篇, 19）へ以下のように返信している。「発展の論理は我々に通常の^{ノーマル}トラストの形態をもたらすが、しかしクズバスはいずれにせよ輝かしい未来を持っている。もしかすると我々はそれをもう一度コロプキンなしに他の人とともに試みるであろう。それでもやはり外国人を必要とする」⁽³⁸⁾。中央委員会での審議への、またАИК-Кの「将来」へのいずれの期待も（不安げなしに）記されているけれども、この時点でのものとしては楽観的すぎると言うべきではないか。

リュトヘルスの宛先無記録の11月16日付書簡によれば、「私〔リュトヘルス〕はブハーリン（Н.И. Бухарин）に打電し（〔СТО議長〕ルイコフは独語を理解できないので）、彼にストライクを受け入れ、リュトヘルスの個人的な代理人としてみなすように頼む。その問題はまた国際的な意味を持つ。〔ケメロヴォから届いた不平不満を調査するために設置された〕クイブィシエフ委員会（メンバー：〔クイブィシエフ議長の他は〕ヴォロシーロフ〔К.Е. Ворошилов〕, Эйх〔Р.И. Эйхе〕, コシオール, そして人民委員会議2委員——同志フートの日付なし書簡による）の決定は、АИК-КはВСНХに従属されるべきである。我々は、場合によってはСТОによる召還でコロプキンが取って代えられるべきであると想定しなければならない。我々の実際の特権は保持されるべきだ。そして明確な党の指令が不可欠であろう」。また「オランダ人の建設」では、同委員会の「結論」が2点挙げられており、1点はコロプキンの召還だが、もう1つは「АИК-Кは、СТОへの上訴権があり、いくらかの特権を保持して、ВСНХの管理下に入らなければならない」と「上訴権」が加えられている⁽³⁹⁾。

この委員会決定を受けてであろう、1926年11月19日のСТО会議において以下引用す

(36) РГАСПИ, 626/1/6/61; *Nederlanders bouwen*, 184; *Trincher Rutgers/Trincher, Rutgers*, 177; Тринчер/Тринчер, *Рутгерс*, 165.

(37) РГАСПИ, 626/1/6/61.

(38) РГАСПИ, 626/1/6/62.

(39) *Nederlanders bouwen*, 184.

る関連決議が採択された⁽⁴⁰⁾。

1926年11月19日 СТО 第293回会議 議題10: АИК-Кの再編について

決議1) АИК-Кの維持を不可欠と見ながら, ВСНХ СССРの管轄方式で緊急の再編を行うことを ВСНХ に提案する。実行については1カ月で СТО に報告する。

2) ВСНХ および経済審議会 (ЭКОСО РСФСР) に, 外国人労働者・専門技師に関して彼らを企業 АИК-К に保持し, 最大限合目的的に利用するため必要な手段を講じることを提案する。

3) 再編される АИК-К の管理機関を3人のメンバーと2人の同候補から組織することを不可欠とみなす。

ここに上記クイブィシェフ委員会の決定が, ВСНХ の管轄方式での再編との文言で正式に СТО で承認されたことになる。更にタルレによれば, 「かくしてソヴェト国家は“АИК-К”を国全体の経済システムに最終的に組み入れる決議を採択した」ということになる⁽⁴¹⁾。しかしながら, 決議2) はすぐに破綻をきたした。つまり, 管轄機関となった ВСНХ は11月30日にリュトヘルス議長下の“АИК-К”管理機関スタッフを承認したけれども, 肝心のコロプキンがリュトヘルスの代理として残留したのである(この時, リュトヘルスはまだモスクワに来ておらず, 欠席のままの「承認」および「残留」決定であった)。タルレは続けて以下のように記している。コロプキンは「政府の決議にもかかわらず, “АИК-К”管理機関スタッフから以前の労働者を排除し続けた。議長のポストに復帰したリュトヘルスは, ひと月も経たず(1926年12月24日に)管理機関を率いることを断った。その長であるコロプキンは, なおしばらくとどまった」⁽⁴²⁾。

タルレはその決議の破綻を全く問題にしようとしな。リュトヘルス側から見れば, これで決着がつけられたわけでは決してなく, 話は以下のように続くのである。

同宛先無記録の11月22日付書簡によれば, リュトヘルスはモロトフ(В.М. Молотов; 党中央委員会書記)に, 緊急に呼び出されたモスクワへ更に詳しく協議するために行くだろう, その時まで「党の」決定を先延ばししてほしい, と打電した⁽⁴³⁾。「また2, 3の電報を見よ」に続いて, 以下が「クズバス年譜」にある。「私〔リュトヘルス〕は, コロプキンが維持されて, 私が辞任する場合, ストライクが管理委員会での私の地位を(党が同意する時)引き受けるつもりかどうか, をなお問う」⁽⁴⁴⁾。同宛先無記録の11月27日付書簡によれば, クイブィシェフはストライクを迎えるだろう; その際ストライクはコロプキンへ簡潔で的を得た批判を行うことを, 私〔リュトヘルス〕はストライクに忠告する; ストライクは, コロプキンへの告発が証明されるや, コロプキンが去ることを許されるよう

(40) “Деятельность АИК-К.....(1922-1926),” 163.

(41) Тарле, *Друзья страны Советов*, 345.

(42) Тарле, *Друзья страны Советов*, 346.

(43) РГАСПИ, 626/1/6/62; *Nederlanders bouwen*, 184.

(44) РГАСПИ, 626/1/6/62.

求めるべきだし、BCHX との実際的な調整を提案すべきだ、と⁽⁴⁵⁾。

同宛先無記録の 11 月 29 日付書簡によれば、私〔リュトヘルス〕は、すぐにモスクワへ行く用意があることを打電し、バルタと私のためのヴィザを電信で調達することを頼む。

「我々は 12 月 2 日に出発するだろうし〔実際には早まる〕、ストライクはモスクワに留まるべきだ。私は私の治療を中断し、2, 3 週間後に再び続けるであろう。コトリャレンコは彼の〔離脱の〕決心を取り消し、なお延期すべきだ」⁽⁴⁶⁾。

1926 年 11 月 29 日にリュトヘルスはその時点までの経過説明を次男ウィレム（ウィム）と長男ヤンに詳しくしている。息子たちにもリュトヘルスは、妻同様に АИК-К の内情を以下抜粋するように話していた⁽⁴⁷⁾。

- ・コロプキンは〔モスクワから〕ケメロヴォに戻り、3 人評議会を設置せず、ハーンを直ちに去らせ、そしてまた他の人たちを立ち去るまでにする言い訳を見つけた。ストライクと技師 B.⁹〔ベーゲマン〕の「建設局」と他のオランダ人だけが残った。ストライクは公然と衝突し、調査旅行のために南ロシアへ派遣された。……

- ・技師ストライクとモスクワ事務長フートは、その時モスクワでコロプキン体制に反対することを試みており、ピエスタニにいる私〔リュトヘルス〕は、我々の決意が容易に実行されていないことを聞き知った時、調査委員会が任命されるように依頼した。それは実現した。その委員会のための私の資料はあまりに遅れて届き、様々な事情によって、我々の〔他の企業と〕異なった例外規定はもはや必要でなく、またコロプキンと私はただただ更に一緒に管理しなければならないとの決議が採択された。／その決議後、ストライクはついにモスクワの様々な指導者とうまく話すことに成功したが、しかし彼らは私がまずそこにいることなしに変更や補充をしがちではなかった。けれども、彼らは私の方に十分な資料がある場合、おそらくコロプキンを召還するつもりであろう〔ここにも楽観がある〕。

- ・皆が喜んで再び戻ってくるつもり of の若干名の入植者〔ストライク、フートら〕の粘り強さと熱意に折れて、私は従う。実際にまたハーグでのより良い治療と新薬インスリン製剤のおかげで、私はまた〔1927 年〕1 月まで〔オランダでの治療を〕延期することができる。そのようにして母親〔バルタ〕と私は大急ぎでモスクワに〔少なくとも 2 週間のつもりで〕行くことが可能だ。

- ・また我々は私の助手-代理人としてふさわしいいかなる候補者も持っていない。我々は〔該当者を〕見出せない。その時ありうるのは、私の訪問がほとんど、ないし

(45) РГАСПИ, 626/1/6/62-63.

(46) РГАСПИ, 626/1/6/63.

(47) Rutgers (Amersfoort) aan Wim en Jan (Zürich), 29.XI.1926, in: *Nederlanders bouwen*, 192-194. なお、リュトヘルスの家庭では日頃から大人と子供の分け隔てない会話が交わされていた。それはリュトヘルスが子供時代に父親が開くサロンに同席し、哲学、社会問題、政治などが自由に議論されたことを見聞きした経験があったからではないだろうか。cf. 山内昭人『リュトヘルスと国際ナショナル史研究 ― 片山潜・ポリシェヴィキ・アメリカレフトウィング ―』（ミネルヴァ書房, 1996）, 23-24.

は全く結果を出さず、また技師ストライク、技師 Sch. [シャーマーホルン]、フート、
その他が姿を消し、そのことによって АИК-К の特別な性格や可能性が消えてしまう。
私にとってその時また、そこに留まるいかなる道理もない。

・もしも今私の訪問がいかなる成果もないならば、そのことを私はその間期待し
ていないが、その時オランダ人からは技師 B.⁴⁸⁾、技師 Sch.、そして J. v. d E. [=J. M. van
der Es (ファン・デア・エス; どの党派にも属さない機械工学技師、化学工場長補
佐)]⁴⁹⁾ だけが、また他の外国人からは技師パウエル (W.J. Powell)⁴⁹⁾ と技師コーザ
ー (A.A. Cother; ロシア人を妻にして子をもうけていた)、若干の労働者、そして何
人かの技術および事務職員が残り、それは通常のロシア人企業となる⁵⁰⁾。

リュトヘルスがモスクワに到着してすぐ 1926 年 12 月 2 日に、党中央委員会書記コシオ
ールの指揮下で協議が行われた。リュトヘルスはその際、АИК-К の経営に留まる用意が
あることを表明した。ただし、コロプキンがロシア人経営責任者にとって代えられるとい
う条件で⁵¹⁾。(このリュトヘルスの条件付き表明について、タルレ、ガルキナらは疑義の
ある解釈を下している。そのことは「おわりに」で論じることにする。)

この時期、ケメロヴォでは外国人との契約の再検討が始まっていた。АИК-К 営業部長
ガフト (Гафт; コロプキンの右腕であったグルジア人) が АИК-К 本部事務局の再編のた
めにモスクワへ派遣された。1926 年 12 月 6 日付指令 (11 月 23 日付コロニー管理機関の
指令書にもとづく) によって、フートが従事している職から解かれた⁵²⁾。

1926 年 12 月 22 日、最終的に СТО は АИК-К との契約を破棄することを決議した。そ
して ВЧХК に「СТО 承認のために、1923 年 4 月 10 日付トラストに関する法令に従って
練られた、АИК-К の管理下にある統合している企業のトラスト規約草案を提出すること」
が提案された。今後この規約の承認まで、創設されるトラストの暫定管理機関を任命する
ことが ВЧХК に委任された⁵³⁾。

そのことについて「クズバス年譜」は以下のように記している。「1926 年 12 月 22 日に
コロプキンへの委任がなされる。ニューヨークとベルリンの事務局は清算される。コトリ

(48) Schoorl Straub, *Een beetje vrijheid*, 20.

(49) パウエルは炭鉱技師長ピアソン (A. Pearson, Jr.) の後任として 1924 年 12 月 15 日に任
命され、ピアソンに劣らず有能だった。Галкина, *АИК-К*, 204. パウエルは処遇に満足し
ていたが、胃病もあり 3 カ月休暇で帰国したもの結局戻らず、1927 年 11 月 19 日に
リュトヘルス宛書簡で、自らの給料および出張旅費の未払いについて苦情を訴えること
になる。РГАСПИ, 626/1/6/64, 69, 70.

(50) 「クズバス年譜」では、他にファン・ローヘン (J.B. van Loghem; リュトヘルスが招聘
した革新的建築家)、ゴールドファイン (I. Goldfein; И. Гольдфайн; ロシア系アメリカ人
で、経験豊かな化学技師、化学工場長補佐) の名前が挙げられている。РГАСПИ, 626/1/6/64.

(51) *Nederlanders bouwen*, 184.

(52) Галкина, *АИК-К*, 194.

(53) “Деятельность АИК-К.....(1922-1926),” 165.

ヤレンコとフートは辞任し、モスクワ事務局はロシア人指導者ガフト（まもなく逮捕される）下に入る。また技師ストライクと技師シャーマーホルンはコロプキンとの共同作業が不可能となったので辞任する⁽⁵⁴⁾。ベルリン事務局の清算について補足すると、1926年12月末に派遣されたロシエフが、АИК-К代表として働いていたバールスの仕事を引き継ぎ、事務局は協定に従って СССР ベルリン通商代表部へ移譲されることになった⁽⁵⁵⁾。

АИК-К 清算が決議される直前のリュトヘルスが、どのように考え、どのような行動を起こそうとしていたか、について「クズバス年譜」が以下のように記録している⁽⁵⁶⁾。

私〔リュトヘルス〕はモスクワに行き、そこで様々な協議がもたれ、最も重要なのは、シベリアから АИК-К を良く知っていたコシオール指揮下の〔上記12月2日の〕協議である。私は、外国人とともに働くことを理解する有能なロシア人代理人が私のそばに置かれるとの条件で、更に働く用意があることを表明する。……しかし、いかなるふさわしい代理人も見つけられず、この人なしには私は責任を負うことができない。それで私は同意を撤回し、コロプキンに〔暫定的に〕議長を任せることにする。その際、彼は技師ゴリャチェフと技師ベーゲマンを代理人として得て、後者はなおあとに残っている入植者の代表としてもである。コロプキンは外国人を保持するためにすべてを行うための必要な指示等を出す。私は歴史的発展と新しい状況を説明するために、АИК-К の全労働者への呼びかけを起草する（英語と露語で）。この呼びかけはまたコシオールによって吟味され、コロプキンによって連署される〔この結末については最終篇〕。

そしてリュトヘルスは、モスクワを発つ前に言った。「それでもやはり我々の実験は成功した。シベリアにおける我々の小さなインタナショナルは、一大産業事業を創造した。それはすべて残り続け、発展するであろう。我々は労働者の国際的連帯が何をする事ができるかを証明した」⁽⁵⁷⁾。これが『リュトヘルス伝』の関係章の結びであった。

1927年1月1日、АИК-К は正式に清算され、再編されることになった。

ガルキナのまとめを引用しておこう。「アメリカのテクノロジー、経営スキル、そしてロシアおよび外国労働者の無私^{フランド}の労働の助けを借りて、コロニーはコークス化学工場の完

(54) РГАСПИ, 626/1/6/64. ガルキナによれば、翌12月23日にリュトヘルスは辞任し、去り、コロプキンが昇格した。Галкина, *АИК-К*, 199. またタルレは、前者による断りを12月24日としている。両方とも（「年譜」も含めて）典拠が示されず、月日が確定できない。

(55) Галкина, *АИК-К*, 194. ニューヨーク事務局の清算・閉鎖については既述したが（第4篇, 19-20）、補足すれば、シッフマンはモスクワ事務所のパンテュホフ（Пантюхов; 解任されたフートの後任）からその清算・閉鎖に関して、いかなる公表もしてはいけなとの指示を受けていたにもかかわらず、それを公表した。Галкина, *АИК-К*, 194.

(56) РГАСПИ, 626/1/6/63; cf. Verkort overzicht Biografie, 13.

(57) Trinchet Rutgers/Trinchet, *Rutgers*, 178; Тринчер/Тринчер, *Рутгерс*, 166.

成と炭鉱の近代化という自らの任務を成し遂げた。その存在のわずか5年間で、雇用労働者はほとんど5倍、石炭産出量は8.5倍となった。労働生産力は1.5倍以上に増えた。石炭価格は28%下げられた。コークス製造量は3倍に増えた。……／……しかし АИК-Кの意義は、経済的功績の面からだけで測られるべきではない。コロニーは、完全な社会的・経済的平等が夢にすぎないことを明確に示したが、しかしまた、多くの障害にもかかわらず1つの目的のために結合された様々な国籍が混ざる家族の可能性を示した⁽⁵⁸⁾。

この前半では、АИК-Кの功績が良くまとめられている。ガルキナは「コロニーは、ソヴェト管理者の命令下よりも自分自身の経営によって操業される時、ヨリ高く効率的であったことは、明らかである」とも端的に表現している。しかし後半では、АИК-Кがめざし貫こうとした「自治」が「夢にすぎない」と間接的に批判されたが、果たして「家族の可能性」しか評価されるものはなかったのであろうか。また、「家族の可能性」にしても、多くの外国人入植者が最後に離脱していったこと、そしてその責任はコロプキンだけに留まらないであろうことを考えれば、手放しで評価できるものではないだろう（「自治」については最終篇で私なりのまとめをするつもりである）。

以上、リュトヘルスが何を考え、どのように行動したかの追跡および分析を中心に АИК-Кの清算に至るまでの経緯を明らかにし、どのような問題があったかを掘り起こしてきた。いずれも新史料にもとづく新たな解明に注力したため、記述に煩雑さを招いた面があるのは否めない。「おわりに」では、改めてその経緯を大まかにまとめ直して、主要な問題を論じることにする。

(58) Галкина, АИК-К, 199.

お わ り に

リュトヘルスは治療のため母国に戻り、1925 年末頃に АИК-К 運営の重荷をもう一度背負うことはできず、コロニーの見通しが明るい今こそ運営を他者に任せる時機だと考えた。けれども、入植者からコロプキン管理への不平不満とリュトヘルス復帰要望が繰り返し伝えられた結果、リュトヘルスは「全経営を引き受けることはできない」と念押しするものの、ベーゲマンを代理人候補にして自らを「助言技師」として協力する覚悟を表明するに至った。

ケメロヴォのストライク、ハーンらからはコロプキン批判は強まるばかりで、「妥協はもはや不可能だ」とみなされた。リュトヘルスは事業が「実際に止められていることを全く良く知っている」にもかかわらず、コロプキン解任の考えに傾くどころか、コロプキンには外国人スタッフを引き留める責務があると考え、むしろ彼らに事業への継続参加を要望した。なぜリュトヘルスはそのように彼らを説得しようとしたのか。以下が考えられる理由である。

①コロプキン体制と闘うためには、リュトヘルスには助力者があまりに少なすぎた。その認識をストライクからも共有していたのだが、それにもかかわらず彼らは「闘いが、おそらく決戦が」迫っており、АИК-К 運営の「孤立化」はやむなしと考えた。それに対してリュトヘルスは、コロプキンが管理を依然続けられるほどの背景があったことに注意を向ける。つまり、我々の根拠地はロシア生活の中で全般的に弱められており、もはや現地の党も我々を支持せず、中央の党は細部にわたって関わり合えない。その上、スペッツの組織的攻撃が後を絶たない。

②そのような状況下で、我々の「孤立化」は危険な実験となる。ゆえに「ロシア化」、つまり АИК-К がロシアの全般的経済システムへ組み込まれるのは不可避である（と言うことは、АИК-К はついに ВСНХ の管轄下となる）。リュトヘルスが最終的に恐れたのは、「ロシア化」反対に固執することによって「СССР の全般的利益を損なうこと」であった（その損失はまた、ソヴェト・ロシア経済の復興・発展に貢献するという АИК-К の大義〔第 3 篇, 22〕を見失うことを意味していた）。コロプキンの問題はリュトヘルスにとっては二義的な意義しかなかった。

このような状況に至って、リュトヘルスはフートとの会談の中で、「私の АИК-К での仕事は、もはや以前ほどはっきりした意義を持ってない。コロニーをソヴェト・ロシアの全般的な経済システムに適合させる時が来ている」との最終判断を下した。「国家諸機関はもはやそれだけ個別の企業に携わることはできない。いまや両足でしっかりと立つことになったロシアの産業は、コロニーの自治をもはや必要としない」とまで言い切っている⁽¹⁾。

(1) Trincer Rutgers/Trincer, *Rutgers*, 178; Тринчер/Тринчер, *Рутгерс*, 165. リュトヘルスが 1950 年代に書き残したと推定される文書では、やや醒めた説明がされている。「経営と

АИК-Кの「自治」は徐々に後退して、創設の理念にもとづいて築き上げてきた「特性」の保持（第5篇, 29）が最後の「砦」となっていた。それは本篇での表現で言えば、「СТОのそばで訴える権利〔上訴権〕」「入植者たちが保持することを貫き通してきたすべての進歩的で合理的なもの」、「外国人スタッフと少数〔精鋭〕の官僚組織」であった。АИК-Кの「最後の」闘争は、「ロシア化」が相手ではもはやなく、それを前提としての条件闘争に限定された。その条件は「特性」の保持であり、それを保障する外国人スタッフの雇用継続であった。

それゆえリュトヘルスらは、外国人スタッフを引き留め、共同作業を図るために臨時管理委員会の設置をコロプキンも含めて申し合わせた。しかし、コロプキンは同委員会を招集しなかったために、リュトヘルスはコトリャレンコを介して党および党中央統制委員会へ調査委員会の設置を要求した。（リュトヘルスの息子たち宛 1926 年 11 月 29 日付上記書簡によれば、調査委員会は設置されたが、これとリュトヘルスによって要請されたクイブィシェフ委員会の組織的な重なり具合が、クイブィシェフの労農監督人民委員部議長から ВСНХ 議長への役職変更もあり、今ひとつ確かめられないが）クイブィシェフ委員会での審議で、コロプキンの召還が想定されたものの、それは続く 1926 年 11 月 19 日の СТО 会議で決議されなかった。ついには、1926 年 12 月 2 日のコシオール指揮下の協議において、リュトヘルスは「コロプキンがロシア人経営責任者にとって代えられるという条件で、АИК-К の経営に留まる用意がある」とまで表明するに至った。

ガルキナは、その「経営に留まる用意」だけをリュトヘルスが条件提示したとして、「しかし、自らの手で作り上げたもの（*детище*）のための絶え間ない闘争で疲れたリュトヘルスは、経験ある補佐役を要求した。彼の条件は受け入れられなかった」とまとめた⁽²⁾。次にタルレは、その表明を最終決着であるかのように記している。「1926 年 11 月に党中央委員会書記コシオールがリュトヘルスを引き継ぐことになった。リュトヘルスは優れたソヴェト・スペッツの自らの代理を任命する条件だけを付けてコロニーに戻ることに同意した」⁽³⁾。更にモレイは、拡大解釈気味である。リュトヘルスは「1926 年末に再びモスクワに戻り、そこでコロプキンが取り除かれ、新ロシア人代理人が指名されることを条件に、ケメロヴォにおける管理者としての責務を再び果たすことを申し出た。彼の条件は満たされず、リュトヘルスはモスクワでの彼の権威がコロプキンのような地位にあるロシア人を

統計の様々な方法と多くの特権を持って『〔組織〕内部の自治』にもとづく小規模な経済を持つことは、ますます困難で不必要になった。／ АИК-К の 5 年間の存在後、『クズバス』の諸産業は、ソヴェト連邦の経済的發展に決定的な役割を果たさなければならないであろうことは明らかだった。このことはロシア人管理下で全般的發展の中の通常の 1 単位^{ユニット}としてのみ可能であろう」。Autonomous Industrial Colony Kuzbas (A.I.K. Kuzbas), in: РГАСПИ, 626/1/9/5-9.

(2) Галкина, АИК-К, 131.

(3) Тарле, *Друзья страны Советов*, 345 (強調引用者). なお、このコシオールの「引き継ぎ」については誤解を招く表現であり、彼は上述のように 1926 年 12 月 2 日の会議を指揮するなど協力した。

消すのに十分でなかった事実と直面しなければならなかった」⁽⁴⁾。

三者とも曖昧な表現があり、外国人スタッフの引き留め、更にその背後にある「特性」の保持の問題が抜け落ちている。まさしくその問題こそが、リュトヘルスにとって重要であった。

CTO は、上記 1926 年 11 月 19 日会議で、外国人スタッフを確保・活用のため必要な手段を講じる、と決議したにもかかわらず、代理人を探そうとしないか、あるいは探しきれず、コロプキンを続投させて、リュトヘルスからの条件が受け入れられる余地はなかった。しかし、リュトヘルスはあきらめなかった。つまり、病と闘いながらのリュトヘルスは、ふさわしい代理人なしには責任を負うことはできないので、条件付きであった同意自体を撤回し、コロプキンに〔暫定的に〕議長を任せることにした。ただし、その議長の下での代理人のひとりに「あとに残っている入植者の代表として」ベーゲマンを推薦し、そしてコロプキンが「外国人を保持するためにすべてを行うための必要な指示等を出す」よう再度訴えた。その「入植者代表」案にもとづくリュトヘルスの努力は、1927 年 1 月 1 日の АИК-К 清算後も一縷の望みをつないでしばらく続くのである（最終篇）。

2025 年 6 月 5 日 成稿・初版

2025 年 8 月 7 日 改訂再版

2025 年 9 月 8 日 改訂第 3 版

(4) Morray, *Project Kuzbas*, 173.

The Autonomous Industrial Colony “Kuzbas” and S. J. Rutgers (6): From Further Development of the Enterprise to Its Liquidation

by

Akito YAMANOUCHI

(Professor Emeritus of Kyushu University)

The enterprise of the Autonomous Industrial Colony “Kuzbas” (AIC-K) continued to expand and develop further from 1925 to 1926. It is characteristic in it that the AIC-K quickly started taking action on making and realizing the next plan “Tel’bess,” though the AIC-K had only just set about integrating practically Leninsk and Prokp’evsk coal mines and Gur’evsk plants in early 1925. In other words, the AIC-K began to aim at the integration in the entire Kuznetsk Coalfield at its early stage and never gave it up until the very end. It is clear that for AIC-K the decision to liquidate itself at the end of 1926 came as a complete surprise.

What became clear in the process leading up to the liquidation decision was that the AIC-K which had been under the jurisdiction of the STO was going to be transferred to the jurisdiction of the VSNKh and, further, to be effectively incorporated into Gosplan’s plan (cf. the resolution of the Presidium of the Gosplan on 16 April 1926). The proposal of the VSNKh’s plan putting all enterprise operations together within the range of the Kuznetsk Coalfield may be conceivably in line with Rutgers’ aim of integrating the management of the entire Kuznetsk Coalfield. But, although the Gosplan’s “large-scale plan for constructing new metallurgical plants in the Urals and Siberia” was to be first realized in the First Five-Year Plan, originally Rutgers and his comrades had drawn up the Kuzbas Project as the Industrial Workers Colony in Kuzbas and the Northern Urals (Nadezhdinsk plants). And then Rutgers enthusiastically advocated the so-called plan “Ural-Kuznetsk Industrial Complex” at the conference of the Presidium of the Gosplan on 31 October 1922, which was not taken seriously by the Gosplan due to the economic and financial condition at the time (Part 3). This preceding fact should be kept in mind.

Rutgers returned to the Netherlands for medical treatment and toward the end of 1925 he thought that he could no longer shoulder the heavy burden of running the AIC-K again and now that all were arranged and the Colony had a better perspective, it was high time to hand it over to someone else. Nevertheless, Rutgers received repeatedly from some colonists complaints and dissatisfaction with K.N. Korobkin’s management and desire for Rutgers’ return to work. As a result, Rutgers came to state as follows: He “could not take over full management,” but was of opinion that Engineer Begemann should take the leadership with a good Russian assistant; In this case, Rutgers was ready to collaborate further as “advisory engineer.”

A.G. Struik, S. Hahn and others in Kemerovo came to express a harsh criticism of Korobkin and regarded “a compromise with him as no longer possible.” Although Rutgers was “fully aware that the enterprise was in fact paralyzed,” he tried to persuade them to go on with their work with Korobkin on the assumption that Korobkin had to fulfill an obligation to keep foreign staff from leaving. It is supposed that the following are reasons for Rutgers’ behavior.

(1) Rutgers had too few allies to fight Korobkin’s management system. Struik and other colonists were also fully aware of that situation. Nevertheless, they believed that “the battle, perhaps a decisive one” was imminent and that the “Isolation” (in opposition to the “Russification”) of the AIC-K was unavoidable. As opposed to them, Rutgers brought their attention to such a background as Korobkin could have for his management: “Man should not underestimate that our operational bases in Russian life in general have also been weakened. [The local Party in] Novonikolaevsk also has no longer supported us and the central Party cannot have been involved in the details.” Moreover, there seems to be no end to organized attacks by the Russian “spetsy” (specialists).

(2) Under such circumstances, the AIC-K’s “Isolation” would be a dangerous experiment. Therefore the “Russification,” or integrating the AIC-K into the overall economic system in Soviet Russia was inevitable (meaning that the AIC-K would eventually come under the jurisdiction of the VSNKh). Rutgers’ ultimate fear was that by strongly insisting on opposing the “Russification,” it would “undermine the general interests of the USSR” (which also meant losing sight of AIC-K’s just cause [Part 3]: contributing to the reconstruction and development of the Soviet Russian economy). The Korobkin issue was of only secondary importance to Rutgers.

In this situation, in a talk with B. Foot, Rutgers passed final judgment as follows: “My work in the AIC-K is no longer as clear as it was before. It is time to adapt the Colony to the overall economic system of Soviet Russia.” Rutgers went so far as to say, “State organs can no longer be involved in individual enterprises. Russian industry, now standing firmly on its own two feet, does not need the autonomy of the Colony anymore.” The “autonomy” of the AIC-K gradually retreated and the retention of some “special features,” which had been built on the basis of its founding idea (Part 5), became the last stronghold of “autonomy.” To borrow expressions quoted in this Part 6, they are “the right to appeal to the STO,” “all the good in the organization, all the progressive and rational,” and “foreign staff and a small [but select] bureaucracy.” The “final” struggle of the AIC-K was no longer against the “Russification,” but was limited to a struggle for retaining those “special features.” It was employment stabilization of foreign staff that could guarantee this retention.

As a result, Rutgers, Korobkin, D.M. Kotliarenko and Foot agreed on forming a provisional Managing Board in order to stop foreign staff leaving and to facilitate collaboration. But Korobkin never convened its meeting, so that Rutgers, through Kotliarenko, requested the Party and its Central Control Committee to set up an Inspection Committee. Rutgers also directly requested the V.V. Kuibyshev Committee to deliberate on this matter. Although the extent in which these two Committees overlapped was not confirmed perhaps because Kuibyshev just changed his chairmanship from the People’s Commissariat of Workers’ and Peasants’ Inspection to the

VSNKh at that time, the Kuibyshev Committee deliberated on Korobkin's recall, indeed. But that recall was not resolved at the subsequent STO conference on 19 November 1926. Finally, at a meeting chaired on 2 December 1926 by S.V. Kosior, secretary of the Central Committee of the Party, Rutgers came to declare: "I [Rutgers] am ready to keep taking on the leadership of the AIC-K, provided that Korobkin be replaced by a Russian manager."

On that declaration L.Iu. Galkina has explained as follows: "Rutgers' requirement was willing to be satisfied only on condition that he could undertake complete direction of, and responsibility for, integrating the AIC-K into the overall economic system. But Rutgers, tired of the constant struggle for what he had built with his own hands, demanded an experienced assistant. His condition was not accepted." G.Ia. Tarle has grasped the declaration like a final settlement: "In November 1926 S.V. Kosior, secretary of the Central Committee of the Party, took over him [Rutgers]. S.J. Rutgers agreed to return to the Colony only on condition that his deputy of the outstanding Soviet specialist be appointed." J.P. Morray has interpreted it broadly: "At the end of 1926 he [Rutgers] again returned to Moscow, where he offered to resume duties as Director in Kemerovo on condition that Korobkin be removed and a new Russian deputy named. His condition was not met, and Rutgers had to face the fact that his authority in Moscow was not sufficient to vanquish a Russian of Korobkin's standing."

All three explanations are vague and leave out the issue of keeping foreign staff back and, more importantly, retaining the "special features" exhibited by foreigners. This issue was exactly the point for Rutgers.

Despite the resolution at the conference on 19 November 1926 to take necessary measures to retain and utilize foreign workers and engineers, the STO (and the Party too) were either unwilling or unable to find a deputy of Rutgers and decided to keep Korobkin as deputy. As a result, there was no room for STO's accepting the condition proposed by Rutgers. But Rutgers never gave up: As Rutgers, struggling with a disease, could not take the responsibility on himself without a competent deputy, he got to withdraw his conditional agreement and to (temporarily) entrust his chairmanship to Korobkin on condition that Engineer Begemann be named not only as one of the two deputies for Korobkin, but also as representative of still remaining colonists." And Rutgers again urged Korobkin to "issue necessary instructions to do everything necessary to retain the foreigners." After the AIC-K was liquidated on 1 January 1927, Rutgers' efforts to bring in such a deputy as representative of colonists were to be made for some time, with a glimmer of hope (to be continued in Part 7).

Key words: Autonomous Industrial Colony "Kuzbas," STO, VSNKh, Gosplan, K.N. Korobkin, A.G. Struik, S.J. Rutgers